

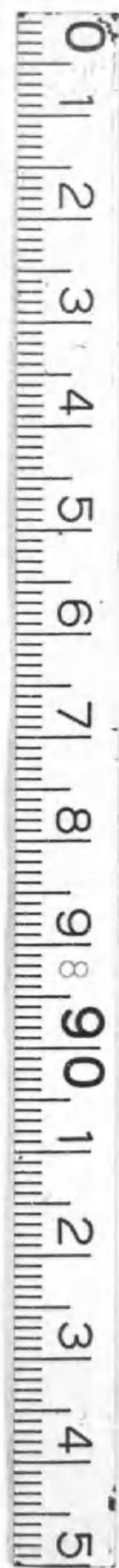


特217

68

東洋歴史の知識

小林鶯里著



始



特217
68



小林鶯里著

東京出版通信社發行

東洋歴史の知識



序

建國以來三千年の光輝ある歴史を持つわが大和民族が、今日の如く世界の列國に劣らないだけの文化を體得し得るに至つたのは、種々の原因を考察しなくてはならない。まづ第一にはわが民族特有の民族精神の發展であり、第二には佛教思想の影響であり、第三には支那思想の輸入であり、更に新しい時代では泰西新思想の影響に負ふ所が多いであらう。しかもわが國民はこれ等の外來思想を取り入れるには何時の時代に於ても極めて堅實な態度を持して來た。即ちわが國固有の思想を決して忘れないで、たえずわが固有思想との融和を圖つて今日に及んでゐる。さてこれ等の思想は如何にしてわが國に傳へられたか。い

ふまでもなく、それはわが國と最も密接な關係にある支那の手によつて傳へられたものが多いのである。換言すれば支那はわが國今日の文化を形成するに、大いに力を與へて呉れた國である。この一事から考へてもわれわれが隣邦支那の國情を充分に知るといふことは殆んど常識までに必要なことであると思はれる。本書は支那三千年の歴史を極めて簡単に、しかも要を得るやうにつとめて平易に述べて、わが國民の總てにこの程度の支那に對する知識は持つてゐてもらいたいの希求から著したものである。讀者諸氏この小著によつて何物か得る所あらば國民叢書發刊の趣旨にも適合して幸に思ふ。

鷺里識

東洋歴史の知識 [目次]

上代の支那	一
夏・殷・周の世	三
春秋と戰國の世	五
周の文化	九
秦の興亡	三
漢の統一	一五
武帝の業績	一七
前漢の衰亡と後漢	二〇
西域との交通	三
佛教の東漸	三

東漢の隆盛と末路……………二六
漢時代の文物……………二六
三國と晉一と胡族……………二九
五胡と東漢……………三〇
南北朝と佛教……………三四
隋の統一……………三六
唐の興亡……………三八
唐の外 經路……………四二
唐の中世……………四四
唐の衰滅……………四六
唐の文物と宗教……………四八
宋・金・遼の興亡……………五〇

宋時代の學術……………五六
蒙古勃興の頃……………五七
太宗と憲宗の事業……………六〇
元の興亡……………六一
明の初期時代……………六六
明の衰微……………七〇
歐人の東漸……………七三
元・明の文物……………七五
清の統一と外征……………七七
清の塞外征略……………七九
清の制度と學術……………八一
莫臥兒帝國の興亡……………八四

英國の東方經略……………六六

阿片戰爭……………六七

長髮賊と英佛軍の侵入……………八九

露國の滿洲經略……………九〇

露國の中亞細亞經略と伊犁事件……………九一

佛國の印度支那經略と清佛戰爭……………九二

北清事件に至るまで……………九四

北清事件以後……………一〇〇

支那の革命……………一〇四

東洋近事……………一〇八

— 了 —

東洋歴史の知識

小林 篤 里 著

東洋歴史は西洋歴史と同じやうに、世界史の大半をなすもので、古くから我が國と文化上、政治上の關係の最も多い國々である。そればかりか、現代の國際上にも亦大きな關係のある國であるから、これらの國々の盛衰、社會の變遷、文化の由來などを知ることは國民にとつて極めて大切なことである。

上代の支那

建國の起源 支那は亞細亞の一大國で、世界最舊國の一つである。土地大きく人

口は多い。古來幾多の聖賢を出し、種々の文明を生み、その學藝思想は多く東洋諸國の模範となり、發明技術はひろく西洋諸國の先驅となつたものもある。それなのに今日は列強に甚だしくおかれてゐる。太古には苗族といふ人種があつて黄河、楊子江の間に住つてゐたが、今から五千年許り前に、漢人種は西北方から黄河の沿岸に移住して、次第に苗族を東征南伐して、先づ北支那の地を占領した。太古の漢人種は穴居、野蠻の生活状態だったが、次第に繁殖發展して、傳説によれば、今から四千五百年許り前に、黄帝といふ英雄があつて、諸部落を征服して、支那帝國統一の基を建てた。黄帝以前にすでに牧畜・農業起り、醫藥の術も始まつて、交易の道も開けたが、黄帝の時には、舟車を造り、音樂を定め、文字を製し、算數をつくり史官の設さへあつた。東亞の名産の養蠶も亦帝の時に始まつた。其他指南車や實際生活に必要な度量衡など色々の發明があつたが、また太古の人は石器を用ひてゐたが、この頃から漸く銅器を使用する時代に進んだ。

堯・舜の二帝 黄帝の後には帝堯、帝舜の二君があり、支那の理想的の二大聖天子である。帝堯はよく國を治め、商法を定めたり、農業をすゝめたりした。舜は孝悌賢明で知られてゐる。帝舜は堯の位を繼いで、禹・契・棄の賢臣を用ひて、内は巡狩・入朝の制を定め、だんく天子の主權を固くして又、父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝の五教を明にして、人民を教へた。外は南方の苗族を征伐して、北方に漢人の勢力をひろめた。二帝は殆んど師父の態度で人民に臨み、後世の帝王に模範視された。特に帝舜は古來の支那人の最も重んずる孝行で著はれ、所謂二十四孝、第一人として名高い。二帝の時代は今から四千餘年前で、ともに今の山西省地方に都をおいた。

夏・殷・周の世

夏の時代 帝堯の末に黄河が溢れて、民が苦しんだが、禹といふ人がこの洪水を

治めた功で、帝舜の禪を受けて位につき、安邑に都を定め國を夏と言った。禹王の死後も國民はその功勞を憶つて禹王の子孫に王位を相續させた。以前は禪讓といつて、堯は舜に、舜は禹にと、有徳の人に位を禪る例だつたが、これからは王位を世襲の制に定まつた。後に桀王になつて、暴虐で人望を失ひ、商の湯王に滅された。殷の時代 湯王は亳に都して、國を商と言つた。後に盤庚の世に、殷に都したから、商はまた殷ともいふ。殷は後に紂王の時に、暴虐で酒池、肉林の樂に耽つたので、天下に王を怨む者が多く、周の武王に滅された。

周の時代 周の武王もまた舜の名臣棄の後である。その父の文王は殷の末に大諸侯となつて、仁政を施し、人望もあつた。武王はこれについて大公望を用ひ、紂王に代つて殷を滅して、王の位につき一族功臣を封じて王室の藩屏とした。そして國號を周と改めた。

武王が死んで、その子成王が猶幼かつたので、叔父周公が之を輔け、政を攝し

て王室の基を定めた。周公は賢明多才で諸種の制度を定め、後世の模範となつた。又此時都を洛邑にうつし、鎬京に對して之を東都といふ。成王の子を康王といふ。成・康二王の時は天下太平で周室極盛の時だつた。周室の東遷 成王の後、王威がだんく衰へ、幽王になつて政を怠つたので、諸侯は叛き、犬戎といふ種族が侵入して、幽王を殺した。その子の平王は諸侯に擁立されて天子となり、犬戎を避けて、都を洛邑に遷した。これを周室の東遷といつて、平王以後を東周の世といふ。

春秋と戰國の世

春秋の世 周の東遷後、凡そ三百年後を春秋の世といふ。この間王權は衰へ、諸侯は互ひに争ひ、強は弱を合せ、大は小を合せ、さうして夷狄は益々侵入した。こゝで有力なる大諸侯は尊王攘夷を名として、王命をかりて、他の小諸侯に號令した

之を覇者といふ。

五霸の業 當時覇をとなへた者が五人あつた。之を春秋の五霸といふ。其第一は今の山東省内の齊の桓公である。桓公は管仲を用ひて、王室を尊び、夷狄を攘つて其功業は盛大だつた。桓公の時は、丁度我神武天皇紀元前後の頃だつた。

齊の桓公の後に、晋の文公は北に起り、楚の莊王・吳王夫差・越王勾踐の三人は南方に起り、各覇をとなへた。

支那の南北 春秋時代は古代の支那の南北戦争時代と見る事が出来る。後世支那の例によると、南北並立の時は北は常に南より強かつたが、春秋時代は、其初は、北が強かつたが、大勢はだん／＼南部が強くなつて來た。思ふに北部は早く開け、だん／＼文弱となり、南部は久しく蠻勇剛健の風を維持したのによる。又古代支那の西北は文化の早く開けたことははるかに南方に優つてゐたが、春秋時代楚・吳・越が次第に興つたので、文物が始めて東南に及んだ。

戦國の世 平王から凡そ三百年たつて威烈王が出た。これから後、二百年の間を戦國の世といふ。この時代には、弱肉強食の争が益々烈しく、春秋時代の諸侯は略滅亡して、その中で大諸侯としての面目を保つた者は、北に燕・南に楚・西に秦があるのみだつた。晋はその臣の韓・魏・趙の三氏に分割され、齊もその臣の田氏に篡はれて、これらの四氏は皆周の王室の命で諸侯となつた。この秦・楚・燕・田齊・韓・魏・趙を戦國の七雄といふ。楚以外の六國の君もやがて皆王と稱して、周の王室はたゞ洛邑の附近を領するの小諸侯に過ぎない形となつた。

秦の強盛 秦は春秋時代から西戎の間で勢力を振つたが、戦國の初に、孝公が立つ様になり、商鞅を用ひて富國・強兵の策を講じ、國力は日に日に強くなつた。かうして秦の勢が他の六國を壓するほどになつたので、こゝに合従の説が起つた。合従の説 合従といふのは、六國が國盟して秦に當ること、蘇秦の唱へたものである。蘇秦は名高い雄辯家で、燕から趙・趙から韓・魏・齊・楚と次第に合従の

利を遊説して成功し、とうく同盟の長となつて、専心秦を弱めることを圖つた。けれど間もなく秦の反間にかゝつて合従は破れた。

連衡の説 蘇秦の友で張儀といふものがあつた。合従の解けるのを見て、秦の爲めに六國を服従させようとして連衡の策を立て、得意の智辯を振つてまづ、魏を説き秦と和せしめ、他の五國も説明したがやがて張儀が秦を去つたので連衡も破れた。蘇秦、張儀の後、合従、連衡の策は益々流行したが、方針が一定しなかつたので國勢は次第に衰へて來た。

秦の一統 六國の方針が一定しなかつたのに乗じて秦は范雎の勸めに従つて、遠交近攻の策を用ひて益々諸侯を弱めたので、周の赧王は大へん懼れて、そつと六國と秦とを伐たうとして反つて秦に攻め滅された。ついで秦の始皇帝は韓・趙・魏・楚・燕・齊を滅して天下を一統した。

周の文化

周の直轄地は王畿といつて、その外は諸侯の封地だつた。中央官制は、太宰以下に六官があつて政務を分掌してゐた。田制は農民に一定の田を貸し、其收穫の幾分を租として納めさせた。兵制は、平時の農民は、即ち有事の時の兵士で、兵農一であるのは古代の常法である。

教育は、學校を設けて、禮樂と道德とを教へ、國家に有用の人物を養成するのを目的とした。經濟上では物品の有無を通ずる市があり、交換の媒介として貨幣も行はれてゐた。

教育・學術 支那教育の始は、帝舜時代の五教で、夏・殷以後は學校の制度が出來、周になつて、學制は尤も備はつた。大學・小學の設備が出來、禮・樂・射・御・書・數の六藝を教科として、大學では修身・治國・平天下の大道を教へ、小學では、

洒掃・應對の小事を教へて、すべて實用の學術を重んじた。次に學術發展の状は堯・舜の時に其根を植ゑ、夏・殷の世に其芽を發し、周代になつて花を開いて、其美を競ふやうだつた。特に春秋戰國時代は、社會の變動と共に、思想・言論が自由となり、立身榮達の途も開けたので、學者・論客は競ひ起り、各自は修養の學術で世を救ひ、身を立てようといふた。

孔子は、周代學者中の偉人であるばかりでなく、世界人類中で、最も偉大な人格を有する大聖人の一人である。孔子の名は丘、字は仲尼、春秋時代の末に、今の山東省内の魯國に生れた。元來魯の國は周初の元勳で、周一代の制度禮法を定めた周公の封地で、春秋に至つても猶其餘風を存し、禮義の盛なのを以て有名であつた。孔子は此國で生長し、幼いときから禮儀を習ひ、十五で學に志し、三十で學成り、四十で徳義の信念が益々堅くて惑はず、七十に至つては、心の欲するまゝに行つて、一々道理に合つた。かやうにして、其學徳の高いと共に、多藝多才

音學の趣味も人に優り、又其意思も極めて強く、「義を見て爲さざるは勇なきなり」といひ或は「身を殺して以て仁を成す」といひ、道の爲には身命をも惜まない風があつた。そして孔子の志は經國實用にあつた。その人を教へるには道徳を重んじまた事効を輕んぜずに、ことに人倫を明にした。孔子も一時魯に仕へて司寇（大體今の司法大臣）となつて、政績は燦然としてゐたが、惜いかな志を得ずに長く用ひられなかつた。乃ち四方に週遊して其道を諸侯に説いたが、教育及び著述に従事して、七十四歳で歿した。論語は孔子や門弟子等の談論を編輯したものである。孔子の遠孫は今日まで連綿して、山東省の曲阜に住し、政府及び國民から非常な優待を受けてゐる。

儒教は實に孔子の大成した徳教で、孔子は身を修め國を治めるには人々が互に親愛する仁により又、仁の最上徳に達するには、家族制度の中心道徳である孝悌の道から始むべきだと教へ、又君臣の名分を嚴にした。其孫子思は誠の道を説いた。そ

の後孟子は性善説を唱へ、又王を尊び覇を卑しんで、仁義を重んじて、功利を輕んじ、且つ人々皆聖人となり得ることを説き、荀子は性惡説を唱へて孟子と相反した而かも皆孔子の流れを汲んだ。

老子は孔子に稍先だつて出て、無爲自然の道を説き、道徳五千言を著し後に列子と莊子とが出でて老子の道を擴張した。この學派を道家といひ、または老莊の學ともいふ。後にこれに附會して道教が起つた。

諸子百家 儒・道兩家の外に楊子は自愛の説を立て、墨子は兼愛の説を唱へて商鞅と韓非とは法家として名高く、又孫武と吳起とは兵家として名高い。世にこれらを總稱して諸子百家といふのである。

秦の興亡

始皇帝の内治 秦の始皇帝は六國を併せた後、從來の封建を廢して郡縣とし、天

下を三十六郡に分けて、各郡に守・尉・監を置きこれを治め、中央政府には丞相・大尉・御史大夫を置いて天下を統べさせ、文字を一定して、地方の富豪十二萬戸を國都咸陽に徙して、禍亂の源を絶ち、また阿房宮以下の大宮殿を渭水の南に築いて壯麗を極め、天下の權力を中央に集めた。

始皇帝の外征 始皇帝は國內に帝威を示すと同時に、外に向つても大に國威を輝かした。時に戰國以來支那の北邊に侵入した匈奴といふ北狄は益々入寇して來たので、帝は將軍蒙恬に之を擊退させ、且つ世界有名の大工事たる萬里の長城を北邊に修築して、其侵入を防いだ。また南越を征代して今の安南地方まで定めた。こゝに秦の天下は大いに擴げられ、威名は諸外國にまで廣まつた。

漢族の發展 堯・舜以來、漢族は次第に發展したが、その根據地である中國は、周の時はなほ黄河の左右に限られて、しかも戎狄がその間に雜居してゐた。春秋・戰國の時、大諸侯の勢力が盛となるにつれて、中國に雜居した戎狄を併せ、且四方

の異族を攘つて土地を拓いたが、この時漢族の勢力の範圍は大へんに廣まり、秦の國威は遠く振つたので、諸外國は秦を訛つて支那と呼び、遂に今日の國名となつた。火坑の暴政 けれど、法令が苛酷の上に、國民は土木と外征とに疲れて、だん／＼新政を厭ひ、學者もまた往々これを非議した。爲に始皇帝は丞相李斯の議を用ゐて醫藥・卜筮・農業以外の一切の書を聚めて、全部焚き、ついで書生四百六十餘人を抗殺した。

群雄の蜂起 始皇帝が死んで少子二世皇帝が嗣いだか、暗愚で、宦者趙高が政權を恣にした。こゝで楚人陳勝が、まづ兵を起し、群雄がこれについて蜂起したが中にも項羽と劉邦の二人が最も勢力があつた。項羽は勇武の軍人で、兵を江東に起し、劉邦は寛仁な長者として、項羽と同時に兵を沛に起した。

秦の滅亡 秦の政事は民を虐げたので、國民は漸くそむき、殊に秦に亡ぼされた六國の遺臣はその機をねらつてゐた。のみならず、始皇帝は統一後十二年で死に、

その子が二世皇帝に立つと、其暗愚なものにつけこみ、宦官趙高は權を專にして、悪政を行つたので、楚人陳勝がまづ叛き、群雄は相ついで起つた。

中にも江東に起つた楚人項羽と、沛に起つた劉邦とは、最も有力な英雄だつた。項羽に先つて劉邦は、つひに咸陽の都に迫つた。時に二世皇帝は趙高に殺されて、秦王子嬰が位に在つた。終に劉邦に下り、始皇帝が「二世三世とかぞへて萬世に至り、之を無窮に傳へん。」と大言した秦の天下も、始皇帝の死後僅に三年で滅びた。是より前、戰國の末に楚が亡ぶと、楚の人は大に秦を怨み、「楚は三戸といへども、秦を亡すものは楚ならん。」といつてゐる。秦の滅亡に當つて楚人が最も多く奮闘したのは、三戸云々を實現したものである。

漢の統一

漢楚の争 劉邦は秦を滅し、政を寛にして民心を收めた。項羽は後れて秦に至

り、その謀臣蒯徹は劉邦を鴻門に撃つことを勧めたが失敗したので、項羽は遂に其勢力をたのみ、擅に群雄を分封し、劉邦には巴蜀・漢中の僻地を興えて、漢王と稱へさせ、自ら彭城に都して、西楚の霸王と稱した。

そこで劉邦は大に怒り、項羽を攻ようとして、秦の滅亡後の天下は、終に漢楚の争となつた。劉邦は其武勇は項羽におとるが、よく民心を收め、且つ蕭何・張良・韓信の三傑や、陳平等を善用したので、漢と楚と相戦ふこと四年で、項羽の勢は漸く衰へ、終に垓下に敗れ、烏江で自殺し、劉邦は天下を一統して帝位に登り、長安に都した。之を漢の高祖といふ。

漢の高祖 高祖は微賤から起り善く文武の人材を用ひて天下を取つたが、晩年には有爲の功臣を忌み憚つて、多く之を誅した。帝はまた秦が孤立した爲早く滅びたのに鑑み、子弟同姓を諸方に封じて、帝室の藩屏とした。けれども諸王の地が廣大に過ぎ、遂に諸王反抗の禍源を作つた。そして高祖の創めた漢朝は、多年支那を支

配して益々支那帝國成立の基を定めて、其威名は内外に振ひ、後世に傳はつた。漢土及び漢人の名は支那人の別名となるまでになつた。

吳楚七國の亂 高祖が死んで、子惠帝・文帝相ついで立つた。文帝は政に勤め民を憫んだので、天下は無事だつた。けれどこの間に諸王は愈々専横となつたので文帝の子景帝は鼂錯の策を用ゐて、諸王の領土を削つたが、吳王は楚・趙・膠西・膠東・菑川・濟南の六國の王と連合して兵を擧げたが、周亞夫に平定された。これから諸王の勢力は衰へ、封建の制も次第に廢れた。

武帝の業績

文運の勃興 秦の火坑以來、古書は殆ど滅び盡くして、學術は衰へたが、漢が興つて後は、文教が漸く再興して來た。景帝の子武帝の時大學を興し、五經博士を置いて弟子を養成し、學術・德行ある者を登庸したので、學術は再び盛となつた。こ

の時、儒者には董仲舒・孔安國等があり、文人には司馬遷・司馬相如等が出て、儒學も文學も大へん發達した。武帝の時、建元といふ年號を建てた。これ東洋での年號の始である。

古朝鮮 漢の東には古朝鮮があつた。古朝鮮は周の始め殷の王族の箕子の封せられた國で、今の大同江と遼河との間の地で、箕氏はつひに今の平壤に都を定めたが漢の初に、燕人衛滿の爲其國を奪はれ、武帝の時、その孫衛右渠は漢の命を拒んだので、武帝は之を征服して、其地に漢の四郡を置いた。その頃半島の南部には、馬韓・辰韓・弁韓の三韓があつた。漢と三韓との關係が漸く起り、三韓と交通した我國人と漢との交通も亦從つて開けて來た。かくて朝鮮の土地は我國と支那との間で、日支關係の事件が大へん多く、文物の傳播も亦多かつた。

南越征伐 曩に秦の始皇帝に征服された南越は、秦末の亂の時に獨立したが、武帝は其内訌に乗じて之を征服し漢の勢力を南方に擴めた。

匈奴征伐 北方の匈奴は漢の大敵であつた。是より前に匈奴は秦の勢力を避けて一時遠く北方に退いていたが、漢の初に、匈奴の單于に冒頓といふ豪傑があつて、支那北邊一帶の地を併せ、時々漢に入寇した。高祖が嘗て之を親征して敗れ、屈辱的の和親を結んでから、匈奴は益々漢を侮つた。武帝は之を慨いて、匈奴を撃ち擧つて祖先と國民の耻を雪がうとし、屢々大軍を出して伐ち、終に内蒙古の地を取つた。衛青・霍去病は當時の二代將軍で、霍去病などは「匈奴滅びずんば家を以て爲すことなかれ」といひ、其意氣特に盛んであつた。

張騫の遠征 これ以前、月氏は匈奴に逐はれて中央亞細亞に大月氏國を建てたので、武帝はこれと同盟して匈奴を夾撃することを計畫して、張騫を使者としてその國に遣つた。張騫は途で匈奴に捕はれ、後に逃れて大月氏に往つたが、目的を達せず十三年の後歸國した。

西域諸國との交通 けれどこの遠征の爲、漢と于闐・大宛・大夏・安息等の西域

諸國との交通が始めて開け、西方の産物は漸く漢に輸入されるやうになつた。武帝はまた張騫の勦に従つて、匈奴の西の烏孫と同盟を結んで匈奴に對した。

前漢の衰亡と後漢

宣帝の中興 武帝は上述の如く外征を事とし、又頻に土木を起したので、財政は困難となり、民力は疲弊し、人心が漸く動き出した爲、帝も自ら悔い改めた。武帝は雄才大略を稱へられる外に晩年に過を悔い改めたのは、特に稱するに足り、爲に英主の名に負かなかつた。帝が死んで昭帝・宣帝が相嗣ぎ、ともに民力の休養に力めた。特に宣帝は賢相・良吏を選んで用ひ善く國を治め、中興の良主と言はれた。宣帝は又武帝の業をつぎ、烏孫を援けて、大に匈奴を破つた。この後匈奴は大へんに衰へ、匈奴の衰微するにつれて、西域の多くの諸國は漢に歸服したので、鄭吉を西域都護に任じて、烏壘城で統監させた。而して後に匈奴もつひに漢に降つた。

かくて武帝以來の征伐によつて、漢の勢力範圍は大へんに擴張し、東は朝鮮から西は天山南路に達し、北は内蒙古から、南は安南地方まで、四夷が殆んど服屬した。王莽の篡奪 宣帝の後は殆んど暗君で、漢業は衰へた平帝の世に外戚王莽が政を攝して、表に恭儉を装つて、次第に人望を集め、とう／＼平帝を弑して、自ら帝位に即いて國を新と號した。けれど法令が煩はしく租税が重かつたので、間もなく四方に叛亂が起つて遂に王莽を斃した。新は僅に十五年で滅んだ。

漢の再興 その時漢の皇族劉秀もまた兵を舂陵に起したが、王莽の大軍を昆陽に破つてから、威名高く、遂に衆に推されて帝位に即き、都を洛陽にうつした。これを東漢の光武帝といふ。ついで諸將を遣り、所在の群雄を征服して、天下を一統した。

後漢の盛衰 光武帝は天下平定後は、力めて兵を用ふることを避けて、専ら内治に注意し、節義を奨勵し、人民を休養させた。明帝・章帝も、亦よく其遺業をつぎ

漢の國運は復た盛となつた。

ところが、第四世の和帝以後は幼弱な皇帝が続いて、前漢の末路の様に外戚宦官の専横なために、政事は次第に亂れて國家は漸くおとろへて來た。

西域との交通

後漢の外征 以前に歸服した匈奴は、王莽の時、また叛いて北邊に入寇した。當時匈奴は南北の二部に分れて、南匈奴は早く後漢に降つたが、北匈奴は西域諸國を威服して漢に反抗した。明帝は遂に竇固等に征伐させ、又武帝時代の政策を用ひて智勇兼備で、眞實の情に富んだ班超を遣として西域の諸國を經略させた。

班超の遠征匈奴の衰微 班超は西域に遠征して、漢の恩威を示したので西域五十餘國の多くは漢に歸服した。漢は乃ちまた西域都護を龜茲に置いて、班超を都護とした。是から北匈奴の勢は衰へ、漢は之につけこみ頻りに攻撃したので、匈奴は終

に遠く西亞細亞の裏海方面に逃れ去り、匈奴の患はここに止みしが鮮卑といふ蠻族が東から遷つて來て匈奴の地を占領し、亦だん／＼北邊の強國となつた。なほ前漢以後、其領土の擴張するにつれて、西方二方面異民族の支那に入つて、居留するものが多く、つひに其住地に國を立てるやうになつた。

東洋と西洋との交通 丁度この頃、西洋では羅馬帝國の勢が盛で、東洋の漢と對立して世界の二大強國であつた。漢は羅馬の強大なるのを聞き、羅馬もまた漢の富強を知つて、互に交通したいと思つたが、中間の安息國が之を妨げた。けれども後漢の末に至り、羅馬帝安敦の使者が海路から後漢に通じた。これから後西洋の商人は、往々今の東京地に來て貿易を行つた。

佛 教 の 東 進

印度の古代 今から四千餘年前に、アリヤン族の一派は中央亞細亞から南に下つ

て印度に入り、先住のドラーヴィダ種族を南方に逐ひ、だんくくその北半部を占領して、こゝに文化を扶植した。その後、國民の中に僧族・士族・平民・奴隸の四種姓を生じ、士族は政治・軍事に、平民は實業に、奴隸は諸種の賤役に従事し、僧族は最高位を占めて、宗教と學術とを掌つた。

僧族の專横 當時の宗教は波羅門教で、全く四種姓の差別を基礎としたものだから僧族はだんくくに宗教を私して專横を極め、他の三種姓の者はその壓制に苦しんだ。

釋迦 この時、中印度の迦毘羅城主の子に悉達といふ人が生まれ、社會の腐敗と人生の無常とに感じて、衆生濟度の念を起し、遂に宮を棄てて山に入り、解脱の法を求めて佛陀となつた。これが所謂釋迦である。

佛教の興起 釋迦は佛教を開いて、平等主義を唱へ、一切の衆生は種姓の差別なく、皆正道を行つて解脱することが出来ることを教へた。だから從來僧族の壓制に苦し

んでゐた諸種姓は、皆この新宗教を歓迎した。

阿育王の出世 その後佛教は次第に行はれたが、阿育王が中印度の摩揭陀國に君となるやうになり、佛教に歸依し、その道を廣めるに盡力したので、西はシリヤから東は今の緬甸にまで、北は中央亞細亞から南は錫蘭島までも、皆佛教の感化を受ける様になつた。

迦膩色迦王の出世 中央亞細亞の大月氏は、迦膩色迦王の時に國勢が大へん強くなり、北・西兩印度を併せて、葱嶺以東をも領したが、王もまた佛教の弘通に力を用ゐたので、大月氏國は佛教流行の中心となつた。

佛教の傳來 この時、東漢の明帝は蔡愔を大月氏に遣つて、佛教を求め、大月氏から佛經と高僧迦葉摩騰とを得て、始めて洛陽に白馬寺を建てた。これ以後、外國の僧侶が支那に來て布教するものが多くなり、佛教は次第に隆盛になつた。

東漢の隆盛と末路

南北匈奴 曩に漢に歸服した匈奴は、漢の中絶すると共に、また北邊を擾した。その當時、匈奴は南北の二部に分れて、南匈奴は早くから東漢に歸服してゐたが、北匈奴は西域諸國を従へて、屢入寇したので、明帝は竇固等に北匈奴を征伐させ、また班超を遣して、西域諸國を經營させた。

班超の遠征 班超は首尾よく西域諸國を威服して、やがて西域都護に任せられて龜茲に鎮つたけれど班超の後は、適當な人がなく、又西域が叛いたので、漢は遂に西域都護府を廢した。

外戚の專横 光武帝は特に外戚の禍を防ぐに注意したが、その曾孫和帝幼にして、即位し竇太后が政を攝するに及んで、外戚始めて勢を得、和帝の後も幼主が多くて外戚愈々專横を極めた。その後、桓帝宦者の力を借りて、外戚の梁氏を誅

してから、宦者は功を負ひ、外戚に代つて政權を握つた。

宦者の跋扈 然るに名節を尙んだ當時の學者等、盛に宦者に反抗したので、宦者は怒つてこれらの學者を指して黨人とし、皆これを禁錮した。これを東漢の黨錮といふ。

群雄の割據 獻帝が西に移つてから、天下は殆ど無政府の有様となり、群雄は四方に割據したが、中にも曹操が最も智略に富み、獻帝を許に迎へて、これを擁して次第に群雄を征服し、遂に江北を平げて江南に向つた。漢の景帝の裔に劉備といふ人があり、曹操に追はれて、江南に入り、孫權の保護を求めたので、孫權はこれを納れ、力を協せて曹操の軍を赤壁に破つたので、曹操は遂に北に歸つた。

東漢の滅亡 その後、劉備はまた孫權の助によつて巴蜀・漢中の地を得たが、揚子江以北は曹操に、江南は孫權に西方一帯は劉備が領し、天下は三分の形勢と成つたこの時、獻帝はなほ帝位にあつたが、曹操の子曹丕は位を己に禪らせ、魏國を洛

陽に建てた。漢は東西を併せて四百六年で亡んだ。こゝで劉備は蜀漢國を成都に建て、ついで孫權もまた吳國を建業に建てた。

漢時代の文物

前漢の文物 秦の時代燒書坑儒の暴政や其後の戦亂の爲め、古典は散亡して、學術の發達を妨げたが、漢の統一後は文教漸く再興した。特に武帝は儒教を好み、大學を興し、五經博士を置いて、儒教を國家政教の標準とした。帝はまた文學を好みて之を奨励した。當時の文豪司馬遷の著した史記は、後世の修史の模範となつた。又高祖の時以來諸宮殿を建て建築の術も漸く發達した。

後漢の文物 光武帝は武功で漢朝を再興したが、國が平定して後は、妄に武功を貪らず、學校を起し、特に名節を勵まし、諸功臣も、皆書を讀み、儒者の風があり明帝・章帝も亦儒を尊び學を重んじたから、後漢の學術は大へん盛で、清節の士も

亦多かつた。墨は秦以前すであつた、秦の蒙恬が始めて毛筆を精製したが、後漢になつて蔡倫は工藝思想に長じ、昔から寫字の用に使つた木版竹簡、絹帛の類をば不便であるといふので、始めて紙を造つた。こゝに文房具が備つた。

三國と晋の統一と胡族

三國の攻争 蜀漢の劉備は一時吳と荊州の地を争つたが、その子劉禪が嗣いで後には諸葛亮の輔けにより、まづ吳と和睦し、力を専らにして魏を伐つこと、前後七年魏の司馬懿がこれをよく防いだので、諸葛亮は志を遂げずして死んだ。

三國の滅亡 諸葛亮が死んで後、蜀漢は次第に衰微して、遂に魏に滅され、魏もまた司馬懿の孫司馬炎に國を篡はれた。司馬炎は更に吳を併せて天下を一統し、洛陽に都をうつした。これを西晋の武帝といふ。

武帝の失政 武帝は、天下一統の後、子弟を要地に分封したが、反つて後の患

を遣し、また當時塞外種族の内地に雜居する者が多かつたのに、武帝はこれの豫防を怠つたので、やがて夷狄跋扈の基を開いた。

西晉の衰亂 武帝死し、子惠帝は暗愚の爲趙王・齊王等の八王が、政權を握らうとして代るべく争つた。この内亂に加へて、當時老莊の學が行はれ、天下の人士は清談に耽つて、國事を顧みなかつたので、内地に雜居した夷狄は、これに乗じて蜂起し、遂に西晉を滅した。

五胡と東漢

晉の南渡 兩漢・三國・西晉の間、塞外種族の支那内地に移住する者多く、中にも匈奴・鮮卑・泥・匈が最も強大だつた。晉の衰へるにつれて匈奴の周、劉淵がまづ亂を起し、平陽に據つて國を漢と號した。子劉聰の時、一族劉曜と羯人石勒に晉を滅させたので、司馬懿の曾孫司馬睿は建康で位に即き、僅に江南の地を保つた。

これを東晉の元帝といふ。晉の南渡と共に、中國の名族もまた江南に移つたので、南方の文化はこれ以後大へん發達した。

前晉の興隆 漢は一時江北を占領したが、劉聰の死後、劉曜は前趙國を、石勒は後趙國を建てて争ひ、石勒が遂に勝つて江北を一統したが、その死後、間もなく領土は分裂された。後趙の亂れた時、氏酋苻健は關中に據つて、前秦王と稱した。その從子苻堅に至り、王猛を用ゐて鮮卑・匈奴・羌の諸種族を降伏させ、塞外の六十餘國からも朝貢をさせ、遂に江南を併合しようとして、九十萬の大軍を起して東晉に侵入した。

淝水の戰 晉の南遷から五十年許の後、苻堅は長安に都せる前秦の君となつた。五胡中の雄傑で、王猛を重用し、江北諸國を併せて、東夷・西域の諸國も征服した後、更に進んで江南の東晉を滅して、天下を一統しようとし、九十萬の大軍を擧げて東晉に迫つたが、東晉の名相謝安の甥謝玄等は、之を淝水に逆へ撃つて、大に奇

勝を得た。當時東晉の兵は少かつたが、上下一致してゐたのに反して、前晉の苻堅は自國內部の統一鞏固でなく、九十萬の大軍はあつたが、人和を缺き、その上敵を輕んじ、意外の大敗を招いた。

後魏の興起 かくて前秦は、淝水の敗後、まもなく衰滅し、鮮卑・匈奴・氐・羌の諸族が、各々一方に割據して國を建てたが、鮮卑の拓跋珪もまた後魏國を建て、平城に都した。これを道武帝といふ。後魏の勢が日に強くなり、道武帝の孫の太武帝の時、遂に江北の諸國を一統した。

東晉の滅亡 東晉も淝水の戦後、内亂が相つたが、その相の劉裕は、遂に國を篡つて、帝位に即いた。これを宋の武帝といふ。後魏の江北一統の後には、支那は南北の兩大國に分れ、江北を北朝、江南を南朝といふ。南朝と北朝とは風尚が違ひ、學術・文藝もおのづから南北の相違を生じた。

五胡十六國 晉の武帝は天下を一統して後、晉の早く亡びたのに鑒み、子弟を封

じて、帝室の藩屏としたが、其子惠帝の愚であるのに乗じて、諸王八人が政權を爭ひ、骨肉は互に相害した。所が當時の士人は漢末の名士の奇禍に懲り、所謂清談に耽り、名教を卑み、世務を輕んじて、眞に國事を憂へる者は少いばかりか、晉の初に地方の武備を弛めたから、晉の元氣は漸く衰へ、漢・魏以來支那の内地に雜居して居た異人種は、漸く其侵略を恣にした。中にも南匈奴は漢の世から支那に内附して劉氏と稱したが、晉が衰へると、其酋長の劉淵がまづ兵を起し、平陽に據つて國を漢と號し、其子の劉聰に至つて、晉を攻めて滅した。で司馬懿の曾孫司馬睿が位に即いて僅に江南の地を保つた。之を東晉の元帝といふ。東晉の初に名臣王導等が熱心に恢復を圖つたが、内亂等の爲に其志が果されず、支那の北部と西邊は、異人種の侵略が益々甚しくして、晉の遷都の前後に侵入した異人種は五種で、列國の興亡したものが十六あつたので、五胡十六國といふ。

南北朝と佛教の東漸

南北朝時代の^{〇〇〇〇〇〇〇〇}大勢 南北朝は凡そ百七十年間對立し、南朝の都は、吳と東晉と同じょうに、すべて建康にあつた。そして吳・東晉及び南朝の宋・齊・梁・陳を總稱して六朝といふ。北朝の後魏は初め平城に都し、後ち洛陽に遷つた。東魏と北齊は鄴に都し、西魏と北周は長安に都した。

南北朝は、二大國又は三大國の對立であるから、五胡十六國時代のやうな紛亂はなかつたが、廢弑の多いことは、前後無比で、南北合計五十君の中、其位を全うした者は二十君だけである。宋の最後の順帝などは、迫られて位を禪ると、「願はくば後身世世また天王の家に生るゝこと勿れ」と歎息したといふ。又多年戰亂の結果として、全國の戸口は頗る減少した。そして南北互に相排斥し、南人は北人を醜虜といひ、北人は南人を島夷といった。然し、大體優柔な南人は、剛健な北人に制せら

れ、南北の對抗は、漸く北人の勝利に歸し、北朝系統の隋は、最後に天下を統一した。

佛教の流行 東晉から南北朝にかけて、佛教の流行は甚だ盛で、この間法顯・宋雲等は遠く印度に往つて法を求め、羅什・達磨等は外國から來て教を説いた。かやうに佛教の流行した結果、繪畫・彫刻等は大いに進歩した。書道の神と呼ばれる王羲之とか、畫家の聖といはれる顧愷之などは、皆東晉時代の人である。

高句麗・百濟・新羅 西漢の末に鴨綠江の上流地に高句麗といふ國が起つて、次第に古朝鮮の地を略し、これと前後して百濟は馬韓の地を統べ、新羅は辰韓・弁韓を併せた。そこで三國鼎立の姿となつたが、神功皇后の時にわが國は新羅を征服し百濟を保護國とし、ついで故の弁韓の地に日本府を建てて朝鮮半島を統治した。

佛教の東漸 高句麗は始めて佛教を前晉から受け、更にこれを新羅に傳へ、百濟は佛教を東晉から受けて、更にこれをわが國に傳へた。佛教の傳來と共に、支那の

文化は朝鮮半島を経て、次第にわが國に輸入せられるやうになつた。

隋の統一

隋の統一 南北朝の末に、北朝最後の北周の外戚で好運な楊堅は、丞相の職に在ること僅か九ヶ月で安坐して周室を簞ひ、帝位に即いて隋の文帝となつた。ついで南朝の陳を滅し、南北を併せたから西晉以後、天下の分裂は三百年許で、支那はまた統一せられた。

文帝は生れつき勤儉で、多年の亂世に疲れた國民を休養させたから、即位の初は民戸僅に四百萬弱であつたが、其末年には八百萬を踰え、國力は恢復し、漢族の雄飛する曙光があらはれた。

煬帝の豪奢・遠征及び外交 所が文帝の子の煬帝は、豪奢を好む性質で、宮苑を營み、運河を開きなどし、又遠征を好み、東は今の臺灣を征伐し、南は今の佛領交

趾支那地方を平げ、西は今の青海地方を降し、西域諸國を招き、更に遠く西洋の東羅馬帝國と交通しようとするやうになつた。又突厥を破つた。かやうにして隋の國威を一時四方に振つたが、當時朝鮮の三國一であつた高句麗を攻めて再び失敗し騷亂も忽ち發して、群雄が四方に起つた。

此時李淵は其次子の李世民と共に、太原に兵を擧げ長安を陥れ、一時恭帝を立て、やがて其禪を受けて帝位に即いた。之を唐の高祖といふ。時に煬帝は南方で弑せられた。かやうにして隋は三世三十七年で、盛時の短きことは、丁度八年前の秦のやうで、隋の次の唐の隆盛で、國運の長かつたことは丁度秦の次の漢に似てゐる。

唐の興亡

太宗の功業 唐は國を保つこと約三百年、漢とともに支那人の建てた世界的大帝國である。さうして唐の高祖の建國の事業は、次子の李世民の力による所が大きい

高祖の在位は僅か、位を李世民に譲つた。之を太宗といふ。

太宗は文武兼備の英主で、房玄齡・杜如晦・魏徵・李靖・李勣等の名臣を用ひたから、天下はよく治まり、國威は四方に輝いた。後世之を貞觀の治といふ。貞觀は太宗の年號である。

武韋の禍 太宗の子の高宗も初めは名臣の輔佐によつて、よく父の業をついだが常に病が多く、政を皇后の武氏に委ねたから、政權は武氏にうつり、高宗の死後二帝が立つたが、武氏は遂に自ら即位した。之を則天武后といふ。武后は權略があり、善く人を用ひ、國威を墜さなかつた。既に張柬之等は武后に迫り、高宗の子中宗を復位させた。所が中宗も柔弱の君で、皇后韋氏に弑せられたが、中宗の姪李隆基韋氏を誅して、父の睿宗を立てて後、自ら帝位に即いた。之を玄宗といふ。

唐初の武功 太宗及び高宗は外征の功が多かつた。突厥は、阿爾泰山附近から起つて、南北朝の末から、漸く勢を増し遂に今の内外蒙古・新疆・中央亞細亞等を

併せたが、隋末・唐初に至つて内亂の爲に漸く衰へたのに乘じて、太宗及び高宗は之を伐ち滅し、また西域諸國を征服したから、唐の領土は中亞細亞地方までも延長した。

西藏は山岳重疊して久しく支那と隔離してゐたが、太宗の時、始めて支那と親交し、其南隣ネパール及び印度も、亦唐に來聘した。かやうにして今の後印度及び南洋諸島も亦唐の威風を望んで來朝する者が多かつた。蓋し支那の帝國主義は遠く前漢の武帝を隔て、太宗によつて實行せられたといふことが出来る。

然し太宗も高句麗の遠征には失敗した。是より先き朝鮮の三國は互に相争つたが太宗の時は高句麗は百濟と連合して新羅に當り、新羅は孤立して、唐に保護を乞うた。そこで太宗は親ら征して遼東に赴き、白巖城を降したが、安市城を圍み、功なくて軍を還した。高宗の時、新羅は又救を乞ふたので、唐は海軍を遣し、新羅と協力して百濟を滅し、ついで高句麗を併せた。さうして新羅はよく唐に事へて國を保

ち、且つ漸次に百濟の故地などを占領して、殆んど半島を統一して二百年ほど之を支配した。

唐の制度 中央政府には、尙書・中書・門下の三省があり、中書省は詔勅を起草し、門下省は詔勅を審査し、尙書省で詔勅を行つた。天下の大政は三省の長官が會同して定めた。尙書省の下に吏・戶・禮・兵・刑・工の六部を置き、各部には尙書があつて、天下の行政事務を分擔した。地方は、天下を十道に分け、道の下に州と縣をおき、州には刺史、縣には令を置いて、各その地方を治めさせた。

田制税法 周代の井田の法は、戰國の頃から次第に壞れ、富豪の兼併は日に盛となり、貧民は困窮したので、西漢から南北朝にかけて、歴代これの救済策に苦心したが、唐の時には均田の法を用ゐて、丁男には、官田百畝を授け、その收穫中から粟二斛を上納させた。これを租といふ。その他、丁男はその土地の物産を獻じ、また毎年二十日間國家のために力役に服し、或はその代償として絹を納めた。前者を

調といひ、後者を庸といふ。租・庸・調の三種は國庫のおもな財源であつた。
兵制 天下に六百三十四府を置き、每府大抵千人の常備兵を置いて、天下の丁男の三分の一以内を府兵に充てた。府兵はその租・庸・調を免せられ、代に毎年冬期には武藝を練習し、また衛士となつて番上し、宮城の守護に當ることになつてゐた。

學制 京師に國子學・大學・四門學等の學校を置き、地方にも各州・縣に學校を置いた。この學校を出た者を生徒といひ、別に州・縣の檢定試験に及第した者を郷貢といつた。歳毎に生徒、郷貢を尙書省に會合させて試験し、合格者を官吏とした。その科目は經學を主とした。明經には經書の義理を問ひ、文學を主とする進士には詩賦の制作を試みた。當時日本・高句麗・百濟・新羅・吐蕃の諸國から唐に行つて學ぶ者が多く、學校の盛なことは前古無比といはれてゐる。

年中行事 正月元旦には屠蘇酒を酌んで新年を迎へ、その七日は人日といつて

七菜を食ひ、三月三日は上巳といつて曲水流觴の遊を催し、四月八日には灌佛の式をやり五月五日の端午には、艾糕を食ひ、香草湯に浴した。七月七日の七夕には婦人は乞巧といつて裁縫、手藝の上達を天に祈り、その十五日は中元といひ、盂蘭盆を行ひ、諸佛に供養し、九月九日の重陽には、山に登つて菊酒または茱萸酒を飲み、歳終の除夕には追儺を行つて疫癘を拂つた。これらの年中行事は秦・漢時代から漸く發達し、唐代に完成して、現時も行はれ、またわが國・朝鮮にも傳つた。

唐の外國經略

突厥 突厥はもと金山附近を占領して柔然に屬したが、南北朝の末に獨立して柔然を滅し、都斤山を根據地として、次第に今の内外蒙古・新疆・中央亞細亞等を併せ、また北周・北齊から歲幣を貪り、當時亞細亞第一の強國となつた。後に國は東西に分れ、その東突厥は唐初に内亂があつて、所屬の部落は離叛したが、太宗は李

靖・李勣を遣つてこれを滅した。

西突厥 西突厥は、千泉を根據地とし、東羅馬と力を協せて波斯を侵し、國勢も強かつたが、唐の高宗の時、蘇定方を遣つてこれを平定させた。

波斯、大食 波斯は曩に安息國を滅して興り、一時強大だつたが、後に西突厥に苦しめられ、ついで大食國に攻め滅された。その王族は唐の保護を求めて恢復を志したがやがて長安に客死した。大食は唐の初に阿刺比亞の摩訶末の興したサラセン國で、宗教の力に依つて四方を攻略し、遂に波斯を併せ、高宗の時、始めて使を唐に通じた。

新羅の一統 朝鮮半島には高句麗・百濟・新羅の三國が鼎立したが、後に新羅の勢が漸く強大となり、日本府を陥れ、百濟を侵した。百濟は高句麗と同盟してこれに當つたので、新羅は頻に唐の保護を求めた。唐の太宗は高句麗を征めて失敗したが、高宗の時新羅と力を協せてまづ百濟を平げ、ついで高句麗を滅した。そこで

唐は平壤に安東都護府を開いて、その地を統べたが、間もなく新羅が叛いて平壤以南の地を略したので、唐は安東都護府を遼東に移した。

日本が國は已に隋と修交してゐたが、唐が興るに及んで、舒明天皇の御代に太宗の廷に國使を派し、これから歷代遣唐使を置き、盛に使聘を通じて、その制度・文物を將來し、後に唐の末、宇多天皇の御代に、遣唐使を停めたまで、僧侶・學生の唐に留學する者が頗る多かつた。

六都護府の設立 唐の太宗・高宗は主として東・北・西の三方面を經營し、南方に兵を用ゐたが、國威の加ふるに従ひ、今の印度支那・南海の諸國も皆來貢し、政令の及ぶ所が頗る廣大となつたので、唐は六都護府を建ててこれを統治した。

大食人の通商 唐の國威の張ると共に、外國との交通は發達し、支那の商船は時に印度洋・波斯灣に往來したが、唐の中世以後は、大食人の來航するものが多く、彼等は南海を経て、交州・廣州の諸港に來て、犀角・象牙・胡椒・香料等を輸入し

唐は市舶使を置いて、これらの外國商船を取締つた。大食人は、この後歐人の東漸の頃まで、久しく南海貿易の主權を握つてゐた。

唐の中世

唐稍々亂る 突厥の餘衆は蒙古地方を亂し、大食は中央亞細亞を占領して、更に今の新疆地方に侵入し、契丹・吐蕃もまた東西の邊境を掠めたり。

玄宗の内治 玄宗また意を内治に用ゐたので、天下泰平で戸口増加し、文藝が隆興したので、後世これを貞觀の治に比べて、開元の治といつた。開元は當時の年號である。わが吉備眞備・阿倍仲麻呂等の唐に留學したのは、玄宗の時代である。

安祿山の亂 玄宗は在位四十五年に亘つたが、晩年には楊貴妃を寵して國政を顧みず、この時、塞外種族の唐に仕へて軍人となるものが頗る多く、中にも安祿山は平盧・范陽・河東の節度使を兼ねて尤も勢が強く、遂に唐の政の亂れたのに、

乘じ兵を擧げて直に洛陽を取り、更に長安に迫つたので、玄宗は蜀に出奔し、位を子の肅宗に譲つた。安祿山の死後、史思明がその衆を統べた、肅宗及びその子代宗は、郭子儀・李光弼等名將に任じ、回紇、大食等の援兵を得て、遂に反亂を平定した。

唐の衰滅

○亂後の國勢 唐は安祿山の亂の後、國勢にはかに衰へ、外國の侵入、節度使の跋扈、宦者の專横等が相つぎ、財政の困難さへ加はつて、遂に滅亡するに至つた。

○回紇 回紇は娑陵河畔を根據地としたが、土耳古族で、もと東突厥に屬してゐたが、東突厥の滅亡した後これに代つて、漠北を占領し唐に歸服した。安祿山の亂に唐を救つてから、頗る尊大となり、歲幣を貪り、また屢北邊に入寇して、唐を苦しめたが、後に黠戛斯といふ北狄に破られて、天山の方に移轉した。

○節度使の跋扈 玄宗の時、邊要の地に節度使を置いたが、安祿山の亂の後、内外多事になると共にその數が次第に増加した。これらの節度使はその管内の文武の大權を握つて、勢日に強く、後には朝廷より獨立した姿をする者があるやうになつた。○財政の困難 安祿山の亂後は、人民の流離が甚だしく、租・庸・調の法が壞れたばかりでなく、節度使にその管内の租税を私するものが多く、朝廷の歲入は大いに減じた。こゝで代宗の子德宗の時、租・庸・調の法を廢して新しく兩税の法を行ひ、更に諸種の新税を起したが、反つて民心の離叛を招いた。

○宦者の專横 德宗の孫憲宗は一時節度使を壓服したが、間もなく宦者に弑せられた。玄宗が宴遊に耽る頃から、宦者が次第に信任されて、勢力を増し、安祿山の亂後は政權を握り、憲宗を弑してから、天子の廢立も全くこの手によるやうになつたが、憲宗の曾孫昭宗が位に即いてからは、汴の節度使朱全忠を招いて、悉く宦者を誅戮した。

唐の滅亡 朱全忠はこの後權勢を専らにし、昭宗を弑して唐を篡ひ、都を開封に奠めた。これを後梁の太祖いふ。けれどその勢力の及ぶ所は僅に中原に過ぎなかつた。各地の節度使は多くは従はずに各々一方に割據して攻争はつゞいた。

唐の文物と宗教

文藝の美 五胡侵入以來、支那の社會は久しく分裂し混亂して、文教發達の勢はふるはなかつたが、隋から唐になり、文藝は燦然として興つた。之を譬へれば、五胡から隋迄は寒冬風雪の下、百草俱に萎み、唐になつて始めて一陽來復して、春光方に麗はしく、千紫萬紅の美を競ふやうになつた。

唐は實に歷代中最も文學の隆盛な時で、詩文の中、詩は特に發達した。中にも玄宗の頃は盛唐時代と稱せられて、李白と杜甫の二大詩人が出たので以て有名である。又此時代前後は、他の藝術も發達し、書には張旭・顔眞卿出で、畫には李思訓・

王維があつて、善く山水を畫き、吳道玄は佛畫に長じてゐた。又玄宗の世には雅俗の音樂共に流行して、中古時代の我國に傳來した者が多い。なほ又玄宗から數十年たつて、韓愈と柳宗元の二大文章家があつた。又古來我國人に愛讀された白氏文集の作者たる白居易も其頃に出たのである。

佛 教 佛敎は南北朝の後唐代になつて益々流行した。太宗の時、玄奘、高宗の時、義淨等が前後して印度に往き、遺經を求めて盛にこれを譯出した。唐一代の間にわが國及び新羅の僧侶の學びに来る者が多く、かの最澄・空海等の入唐したのも徳宗の時のことだつた。佛敎の流通と共に、印刷・繪畫・彫刻・建築等は大へん發達し、殊に繪畫には吳道玄を初め、南宗畫の祖王維、北宗畫の祖李思訓等の名手が輩出した。

道 教 道教は道家の説に佛敎の意を加へた一種の宗教で、東漢の末に出た張道陵が創つて、南北朝時代に成立した。唐の皇室は老子を祖先と定めた爲に、道教を

厚く崇ぶこと、武宗は道教を尊信する餘り、一時佛教その他の諸宗教を禁止した。諸宗教・道・佛二教の他に、當時、中央亞細亞に流行した祆教・摩尼教・景教等の諸種の祆教は前後して支那にはいつた。祆教は西紀前第七世紀に出でた波斯の蘇魯支の創めた拜火教で、高祖の時に唐に傳り、摩尼教は西紀第三世紀に波斯の摩尼の唱へた宗教で、則天武后の時に唐に來た。景教は唐の太宗の時に支那に渡つた耶蘇教の一派ネストル教で、西紀第五世紀にシリヤのネストリウスの唱へたものである。當時これらの諸外教の寺院をすべて三夷寺と稱へた。この他、支那の諸港に來住した大食人の間にイスラム教が行はれた。

宋・金・遼の興亡

宋の太祖 唐の末及び五代八十餘年の紛亂に、國民はすつかりあきて、早く英王の統一政治を望んでゐた。かくて後周の末になり、諸將は節度使趙匡胤を有爲の君

として之を推戴して、汴に即位させた。之を宋の太祖といふ。

太祖は深く武人の專横を心配して、宰相趙普と謀り、文臣を任用して、文治主義の政治を行つた。これによつて國民は休息することが出來たが、宋時代の武力の弱いのも原因はこゝにあつた。支那は古來文武並重の方針を執り、漢唐が國勢の強盛だつたのも、此の爲だつたが、宋になつて武臣を忌み、且つ輕んずるやうになり、其餘弊は後世にも及んだ。そして宋の初の頃は、なほ獨立の數小國であつたが、太祖及弟太宗は、次第に之を征服して、遂に天下を一統した。當時宋の東北に建國した遼の勢が盛で、宋・遼二國が將に相争はうとした。

遼と渤海 遼は契丹人の國である。契丹は南北朝の頃から、今の遼河の上流地方に居た滿洲族で、唐に歸服したが、唐の末、其主耶律阿保機が雄略があり、遂に皇帝と稱して臨潢に都を定めた。之を契丹の太祖といふ。太祖は悉く今の蒙古の大部分を併せて更に東して渤海をうつた。

渤海も今の滿洲族の靺鞨族が唐の中世に建てた國で、一時東方の強國だったが、契丹の太祖は其國都忽汗城を陥れて渤海は十四世二百十餘年で滅んだ。かくて契丹は更に南に下つて支那に侵入しようとしてゐたが丁度よく、太祖の子太宗の時に後晉は其建國に當り、契丹の後援を得て其報酬として、支那東部の十州を契丹に割與した。既に太宗は國を遼と改め號し、後晉が契丹に對して無禮なのを怒つて、大舉南征して後晉を滅し、其國都汴に據つたが、支那人の反抗に堪へずして、忽ち北に還つた。

宋・遼の和戰と遼の全盛 宋の太祖の時には、宋・遼の二國の間は平和だったが宋の太宗は天下一統の勢に乗じて、遼をうつたが、志を得ず、其子眞宗も遼の軍を澶州に防いだ、勝利の望なく、遂に歲幣として多額の銀・絹を遼に與へて、和睦した。時に遼は太祖の玄孫聖宗が位に在り、遼の全盛時代だった。

宋の仁宗 眞宗の子仁宗になつて、西藏族の趙元昊の建てた西夏も、屢々宋の西

邊に侵入して、宋は又一つ外患を加へた。遼は之に乗じて、又宋に迫つたので、宋は歲幣を増額して、和約を繼續し、更に西夏にも歲賜を與へて、宋の臣下としての禮を執らせることを約して、戰爭を避けた。

かくて對外の勢は振はなかつたが、仁宗は恭儉の君で、人を愛し民を恤れみ、宋代第一の仁君として漢の文帝と並べて稱せられ、また名臣・大儒が大へん多く、中にも范仲淹は宋朝の人物第一の名があつた。

新法と舊法 仁宗の後英宗を経て神宗になつた、彼は雄心氣概があり、多年不振の國勢を振ひ興さうとして、王安石を宰相とした。こゝで王安石は舊法を改めて、新法を發布し、富國・強兵の策を建て、富國策としては青苗・均輸・市易などの諸法を、強兵策としては、保甲・保馬の法を行つた。

然るに司馬光等の保守的政治家は之に反對したので、新法・舊法兩黨の争がおり、三十餘年争つた。其間國家の經綸を主眼とせる政論のその上に、個人的私怨

の相互的報復を以てするやうになつた。

宗・遼の衰運と金の勃興 神宗の後哲宗を経て徽宗になつた。彼は多藝の君だつたが、治國の徳に乏しく、宋の國運が漸く衰へて來た。又遼も全盛時代は既に過ぎ去り、徽宗と同時代の天祚帝の頃、其國運の衰へた時に金といふ強國が、遼の北方にあらはれた。金はもと女眞と號し、黒龍江地方に居り、遼に屬してゐたが、阿骨打が會長となるに及んで、遼の衰へに乗じて、其軍を破つて獨立し、都を會寧に奠め、國を金と號した。之を金の太祖といふ。宋の徽宗は金の勃興を聞き、之と協力して遼を挾撃して、其地を分割しようとした。金は東北から、宋は南から遼を攻めて遂に之を滅した。遼は九世二百年で亡んだ。時に遼の王族耶律大石は、餘衆と共に中央亞細亞に走つて、西遼國を建てた。

是の役で金軍は連敗したので、金は殆んど遼の舊領全部を取り、宋は僅に今の北京附近の地を得ただけであつた。而して宋は遼よりも更に強大な金と其境を接する

やうになつたのは、狼を拒いで、虎を引き入れたるやうなもので、實力ない外交は遂に失敗に歸した。

宗の南渡 かくて金は宋の弱點を看破し、太祖の弟太宗は南に下つて宋を攻めた。徽宗は急に位を子欽宗に譲り、之を防いだが、金は遂に宋の都を陥れ、徽宗・欽宗並に后妃等を執へて北に還つた。

こゝで欽宗の弟高宗が位に即いたが、金の勢を避け、遂に江南に退却して、都を臨安に遷した。之を宋の南渡と稱して高宗以後を南宋といふ。

宋・金の和戦 南宋の初、岳飛・胡銓等、軍人學者の主論者が少くなく、若し上一致したならば、恢復の業は容易だつたらうに、元來高宗は性質が怯懦の上に、二帝と生母章太后とが擒となりて金に在るので、和議を希望した爲に宰相秦檜は巧みに和議を唱へ、遂に歲貢を納めて金と和して、金の封冊を受けたばかりでなく、主戦論者たる岳飛を殺した。

是の後金主亮に國都會寧が邊鄙なのを厭ひて、今の北京に遷都し、ついで大軍を以て宋を攻めたが、利あらず、且つ軍中に弑せられて、其從弟世宗が位に即いた。賢明にして國人は小堯舜と言つた。時に南宋には孝宗が位に在り、彼もまた賢明で宋金の間の無事三十餘年に及んだ。

宋時代の學術

儒學の新學風 宋代の特色は、武ではなくて文にある。特に儒學の研究法を一新したのは、支那學術史に光彩を添へる者である。漢・唐の儒者は、多く經書の字句註釋に苦心したが、宋の儒者は之に満足出來ず、儒學の哲學的理論を研究した。而して北宋には周敦頤及び二程即ち程孝等があつて、此新學風を起し、南宋になつて朱熹が出て之を大成し、爾來儒學の正統となつた。是れが即ち我國にも傳はつた朱子學である。朱子と同時に陸九淵があり。別に一家の説を立てた。

文藝 唐に美觀を極めた文章も、唐末五代の亂に衰へたが、宋に至つて再興し特に議論文の妙は、唐の人にも優つてゐた。唐宋二代の八大家の文章を編輯したるものを唐宋八大家文讀本といつて、徳川氏以來、漢文教科書として、弘く我國にも行はれた。この八大家の中、唐人は二人で、宋人は六人である。次に宋代の修史も頗る發達して、中にも司馬光の資治通鑑は最も著名である。

宋の畫も亦發達し、徽宗は特に美術の發達を奨勵した。
佛 教 宋代尤も盛に行はれた佛敎は禪宗で、我國にも傳はり、我僧榮西・道元の入宋や、宋の僧遺隆の歸化等によつて、禪宗は鎌倉時代以後盛に流行した。

蒙古勃興の頃

成吉思汗即位 今は蒙古人の大部分は支那に屬し、其一部分は、露西亞に屬し、政治上は固より大なる勢力はないけれども、其過去を顧みれば、大に人意を強うす

る者があつた。六七百年前、古今無比の大帝國を建て、其名は世界に鳴り渡り、蒙古の名は、遂に所謂黃人種の總稱となるやうになつた。

蒙古族は、もと外蒙古の黒龍江の上流、オノン・ケルレン兩河の地方に遊牧して遼と金に屬してゐたが、宋末になつて、鐵木眞といふ者が出た。幼くして孤となり逆境の間に成長して英雄となつて、遂に蒙古部の長となり、ナイマン等の諸部を併せて、略々内外蒙古の地を占領して、ついに、諸酋長をオノン河上に會して、大汗の位に即き、成吉思汗と號したり。即ち蒙古の太祖である。

成吉思汗の南下 成吉思汗は既に塞外を一統して、次に南に下つて西夏を降し、更に金を侵したので、金は河北を割いて和を請ひ、都を汴京に遷した。成吉思汗は更にその鋒を轉じて西域に向つた。

西域の狀態 曩に摩訶末の建設した大食國の領土は、一時亞細亞・阿弗利加・歐羅巴に誇つたが、唐末の頃から次第に衰微して、西突厥の餘衆でその地に住んでゐ

た者が勢を得た、中にも突厥族の建てたセルジュツク王家は亞細亞の西半を一統したが、北宋の末、その勢が漸く衰へたる頃、遼の耶律大石が来て中央亞細亞を占領した。

西遼の盛衰 耶律大石は中央亞細亞を占領して、西遼國を建て、都を虎思斡耳朶に奠めて、今の新疆の大部をも服従させ、勢力が強大だつたが、その孫直魯克の時乃滿の太陽罕の子屈出律は蒙古に逐はれて來奔し、ついで西遼を奪つた。屈出律は間もなく成吉思汗に破られて死に、かくて蒙古は花刺子摸と境を接するに至つた。

花刺子摸の強盜 花刺子摸の王家は突厥族で、もとセルジュツク王家に屬してゐたが、後に獨立してこれを倒し、また西遼を奪つた屈出律を助け、その報酬として中央亞細亞を領した。かくて花刺子摸の勢は益々強大となつたが、その王マホメツトは蒙古から來た隊商を殺した。

成吉思汗の西征 是で成吉思汗はその四子、朮赤・察合台・窩闊台・拖雷と共に

花刺子摸を撃ち滅した。蒙古の將、哲別・速不台等は、更に太和嶺を踏えて、阿羅思を侵略したが、成吉思汗が東歸するについて軍を還した。

西夏の滅亡 成吉思汗は東に歸つて西夏を滅し、更に金に侵入しようとしたが、途中で死んだ西夏は建國からこゝまで百九十年だつた。

太宗と憲宗の事業

金の滅亡 成吉思汗の第三子窩闊台が嗣ぎて大汗となつた。これを太宗といふ。太宗は都を喀喇和林に奠めて、また父の志を紹いで金を侵したので、金の哀宗は蔡州に出奔したが、蒙古は宋と力を協せ、金を夾撃してこれを滅した。金は建國よりこの時まで百二十年だつた。

拔都の西征 この時、高麗もまた蒙古に降つて、東方が稍事なかつたので、太宗は西方の侵略を企て、朮赤の子拔都を元帥として、太宗の子貴由、拖雷の子蒙哥等は

と共に歐洲に侵入させた。蒙古軍はまづ阿羅思を蹂躪して、遂に歐洲内地に迫り、一軍は波蘭土に入り、一軍は匈牙利に入つて、殺掠を恣にしたが、會太宗が死んだので東に還つた。

憲宗の即位 太宗の後、子貴由が立つた。これを定宗といふ。在位三年で死んだ蒙古の法で、大汗となる者は必らず諸王・諸將等によつて組織されてゐる大集會の推戴を経ることになつてゐる。この時、拖雷の子蒙哥、大集會に推されて大汗となつた。これを憲宗といふ。こゝで太宗の一族は不平を抱いて、後蒙古大汗國の分裂を起した。

元の興亡

世祖の統一 忽必烈が兄について大汗となつた。之を世祖といふ。世祖は都を今の北京に遷して、之を大都と名づけ、國號を元といふ。當時南宋は孝宗の後で國勢

は振はなかつた。世祖は父祖の遺志を繼いで、大舉して南征した。宋の文天祥等が勤王の師を起したが、衰弱の宋は連勝の元に敵すること出来なくて皆敗れ、國都臨安が遂に陥つた後は、次第に南方に追はれ、厓山の戦で宋の君臣は皆海に没し、宋は十八世三百廿年で滅び、世祖は全く支那を統一した。

高麗は以前に蒙古に降つてはゐたが、心服はしてゐなかつた。しかし世祖の時には全く元に臣服し、高麗の忠烈王は世祖の女を迎へて妃とした。これから高麗王は歴代元と婚を通じて内治・外交一切元の命を奉じた。其外今の後印度諸國も、世祖の遠征軍に降服したので、瓜哇・蘇木都刺等の南洋諸國も、亦皆元に來貢した。このやうに世祖の外征は常に功力があつたが、唯我國に對した入寇は非常の大失敗に終つた。

マルコポーロ

東西の交通 元の領地は亞・歐の兩大陸に跨つてゐたので、東西の交通は大へん開けた。特に南支那の泉州は、一時繁昌の港となり、外國商人の來住が大へん多く上海も亦當時の貿易港だつた。且つ世祖は勿論、他の蒙古の諸王も、國の内外人種の異同を問はず、廣く人材を求めたので、波斯・阿剌比亞・小亞細亞及び伊太利等の遠國の人も、亦元朝に仕へた。中にも、伊太利人マルコポーロが最も有名なものである。また蒙古人の大國建設、及び東西交通の勃興は、西洋の地理學の發達と見識の進歩を助けて、世界文化の發展に益する所があつた。

耶蘇教の傳來 宋以來、歐洲の耶蘇教徒は回教徒に對する十字軍に従事したが、遠く蒙古と同盟して近く回教徒を攻撃しようとして企て、又東洋に耶蘇教を布教しようとして定宗・憲宗の頃から、羅馬法王・佛蘭西王等の使者及び宣教師が東に來る者が大分あつたので、耶蘇教は再び支那に行はれた。

元朝の衰微 元朝は世祖になつて隆盛を極め、其後は漸次分裂衰微の傾向があつ

た。其源因の主なる者は、(一)元の版圖が廣過ぎて、各方面特別の文化を存し、統一の實がなかつた事。(二)元の相續法は必ずしも父子の世襲を認めず、クリルタイ大會の決議によつて定まつたので、帝位相續の際は常に多少の争をおこし、權臣の專横が之に伴ひ、或は内亂を起すやうになつた事。(三)多年戦役の結果として、財政困難となつた事。(四)世祖以來、西藏から傳來した佛教の一派喇嘛教を尊信し遂に僧侶專横となり、且つ佛事供養の費が多かつた事等である。

○の滅亡 元朝が漸く衰へた時、洪水・飢饉・地震等の天災地變相ついで起つたので、さなきだに北方異人種の壓迫に不平だつた南方の漢人は、諸方に革命運動を起した。中にも江淮地方に起つた朱元璋の勢が最も強く、まづ南方を平定して金陵で帝位に即いた。之を明の太祖といふ。而して明軍が北征して元の大都に迫ると元の順帝は大都を棄てて蒙古に奔り、其子孫は韃靼の可汗と號した。かくて元は世祖の國號、制定以來十世九十八年で滅びた。

諸汗國の盛衰 蒙古の四大汗國の中、太宗の後の窩濶臺汗國の諸王は、常に不平を抱き、世祖になつて、太宗の孫ハイヅが遂に叛旗を擧げ、其亂四十年に亘つたが亂の平定 共に、同汗國は滅亡し、其地を察合臺汗國に併せられた。

而して察合臺・伊兒・欽察の三汗國も各々一時は盛になつたことがあつたが、蒙古の諸王は、大てい戦争に長じて、治國の能に乏しく、その上其相續法の不完全な爲に王位繼承の時、常に紛紜を起した爲に、元朝が東方で衰亡した間に、西方の三汗國も漸く衰微分裂して、互に相攻め争つた。

帖木兒の雄圖 時に蒙古の疎族に帖木兒といふ者があり、もと碣石から起り、察合臺汗國に屬してゐたが、世界一統の霸氣があつた。當時諸汗國中尤も慄悍な察合臺汗國人を率ゐて、まづ同汗國の分裂を統一し、元朝滅亡の翌年に都を撒馬兒罕に奠めて、遂に伊兒汗國を併せ欽察汗國を降して、印度に入り、更に小亞細亞に進み、土耳其帝バチャジツドを破つて之を擒にした。かくて中・南・西亞の大部分を

平定し、埃及をさへ入貢させたので、第二の成吉思汗がここにあらはれ、第二の蒙古大帝國がまた起つた。

海都の反亂 曩に憲宗が蒙古の大汗となつてから、太宗の子孫の窩濶台汗國の諸王は常に不平を抱いてゐたが、世祖が宋の經略に暇のないのをいゝ機會として、太宗の孫海都は反旗を揚げ、察合台汗國及び欽察汗國の諸王を誘つて、大汗の直隸地の中央亞細亞を占領した。かくて三汗國の諸王は、遂に海都を擁して蒙古の大汗となし、世祖と戦つて、互に勝敗があつた。世祖が死し孫成宗が嗣やうになつたが、海都なほ入寇したが、海都の死後、間もなく察合台汗は元に降り、元の援兵を得て窩濶台汗國を滅し、その地を併せて内亂始めて鎮定した。この約四十年の内亂によつて蒙古の諸汗國と元との關係は殆ど絶え、諸汗國は次第に獨立の姿をなすやうになつた。

財政の困難 元は連年の戦争で財政が大へん亂れたので、交鈔を發行したが、濫

發の結果、價が次第に下落して通用しなくなり、従つて物價が騰貴して、國民が大へん困つた。

喇嘛の尊信 吐蕃には唐の中頃から佛教の一派喇嘛教が行はれて、喇嘛の勢力が次第に強盛となつたので、前に世祖が吐蕃を平定した時、喇嘛八思巴を帝師に奉つて、吐蕃を治めさせた。この後、元の歴代の君主は皆喇嘛を尊信した爲、佛事供養の費用多く國民の負擔が増加した。

元の滅亡 かく財政の困難が甚だしいのに、順帝は宴樂に耽つて政を顧みなかつたので、かねて蒙古の虐待に不満を懷いた漢人は、この機に乗じて四方に競ひ起つた。中にも朱元璋の勢が日に強く、遂に金陵で帝位に即いた。これを明の太祖といふ。明の軍は速りに之を破つて、大當に迫りこゝに元は九十八年にして亡びてしまつた。

明の初期時代

太祖の政治 明の太祖は即位の後、元の餘衆を破り、國內の群雄を征してからは専心内治に意を用ひた。一方漢人的文物を復興することに努め、法律の修正をしたかうして太祖は武で亂を定め、文で太平を致し、漢人はまた喜んで漢人の天子を戴いた。太祖はまた諸皇族を要地に封じて、帝室の藩屏としたのは大へんよかつたが、死後の事を過慮して、多くの功臣を誅したのは失策だつた。

成祖永樂帝 太祖が死し、その孫惠帝が即位したが、叔父・諸王の強大を恐れて之を抑壓したので、霸氣ある燕王朱棣は、遂に兵を燕京に擧げ、君側の奸臣を除く名の下に、金陵を攻めたが、之に敵する勇將なく、且つ金陵の宦官燕王に内通したので、惠帝は遂に出奔し、燕王が代つて天子となる。之を成祖といふ。

永樂帝はついに燕京を北京とし、後之を首府として、舊都金陵を南京とした。帝

の時、内治が頗る擧がり、外征の功も亦少くなく、北は長城を修築して漠北に親征し、蒙古の餘衆を鎮壓し、南は安南地方を伐つて、一時之を征服した。また成祖は惠帝が或は海外に出奔しはしないかを疑つて、宦官の鄭和に命じて、海外を探らせた。鄭和は前後七回遠洋諸國に使用して、明の恩威を示したので、南洋及び印度洋方面の三十餘國が明に來貢し、明人は國家の盛事として誇つた。

次にまた成祖の時に彼の中亞の帖木兒大王は、初めは遠交近攻の策をとり、好を明に通じたが、後に大國をたて、明の内亂をきき、之を伐つて、再び蒙古人の勢力を東亞に回復しようとし、東征の軍を起したが、中途で病死し、成祖と帖木兒との東西兩雄の衝突を見ずに終つた。

宣徳の治 成祖の後、仁宗を経て、宣宗になり、立國の基礎は既に堅く、賢相は多く出て、國內が善く治まり、明の盛時となつた。また此頃から、明は美麗なる陶器の製造に有名になつた。

日・明交通 元寇弘安の役の後、日本と支那との間には、僧徒商人等の私に交通する位で、公然として國際の交通は稀だつたが、我足利義滿は屢々明と交通貿易して、明の永樂錢を輸入して、流通を助けた。其後足利時代の本邦と明との其交通は頗る繁くなり、明からは藥種・顏料・錦繡・諸織物を輸入した。又當時明に行つた本邦人の中、最も有名なのは雪舟・絶海の二人である。

明の衰微

宦者の專横 初め明の太祖は歴代の成敗に鑑みて、宦者が政事に預ることを禁じたが、成祖の篡立した時、宦者が内應したのでこれを信任したので、宦者は次第に勢力を得て、成祖の曾孫英宗以來、政權を専らにした。かくて中央政府の腐敗に乗じて、南倭・北虜の外寇が起つた。

瓦剌部の強盛 この時、瓦剌部の勢が漸く強く、天山北路及び外蒙古の西半を

併せて、その部長也先は元の遺族を擁して明に入寇した。英宗は土木まで親征したが、大敗して虜となり、纔に和議によつて放還された。けれど間もなく、也先は内亂の爲に斃れ、瓦剌部は衰微した。

倭寇の侵害 かく北邊の安くない間に、明の東南海は倭寇の侵害を蒙つた。元の中頃から、わが國の邊民は海賊となつて、高麗及び元の沿海を侵掠し、それで明初までつゞいた。これを倭寇といふ。その後、わが足利義滿が、明に好を通じた後、一時その害もやんだが、足利氏の衰へるにつれて、倭寇はまた起り、明の奸民もこれに加つて、大いに沿岸を荒した。明の世宗の時に、俞大猷が倭寇を福建に破つてから、その勢が衰へたけれど、餘黨はなほ近海に出没した。

朝鮮の興起 高麗は久しく元に臣服してゐたが、元末明初になつて、内には姦臣の憂があり、外には倭寇の患があつて、其國勢が全く衰へた。時に李成桂は倭寇をうつて功を治め、漸く人望を收めて、高麗王朝の晩年の忠臣である鄭夢周等の反對

があつたにもかかはらず、遂に自立して王位に即き、高麗は四百五十六年で滅んだんかくて李成桂は今の京城に都して、明の冊封を受けて其東藩となつた。之を朝鮮の太祖といふ。今の李王家の祖先である。

萬曆朝鮮の役 北虜・南倭の患がやんで、明の邊境も稍々しばらく無事の姿であつたが、神宗の世になつて、俄に東方の大事變が起つた。即ち我豊臣秀吉の朝鮮の役である。是時、明の神宗は藩國の救援と、自衛との爲に、朝鮮に出兵したが、大軍を動かし、巨額の兵糧其他の軍需品を費して、しかもついに大敗したので、國力は大に疲弊した。

滿洲の勃興 この時に、やがて明朝を覆すべき強敵滿洲人は、明の東北に勃興した。其状態は恰も中古史の末、南宋の衰弱した時に、蒙古が東北方に勃興したと同じ様なものである。

蒙古人が金を滅してから、滿洲族の勢は振はなくなつたが、明の萬曆時代に、

一酋長があつた。愛親覺羅氏で、名を努爾哈赤といふ。兵を今の奉天の東方にある興京地方に起して、次第に滿洲族を統一して、遂に國號を建てて後金と稱し、帝位に即いた。之を清朝の太祖とす。

太祖はついで明と朝鮮との聯合軍を破り、愈々勢を得て、今の奉天を取り、ここに都をうつした。是より太祖及び子太宗は、益々遼東及び東蒙古地方を征服して太宗の時には、國號を清と改めた。時に朝鮮は猶明に通じてゐたので、清の太宗は之を征して全く屈服させた。

歐人の東漸

歐人東漸の由來 元の代に東西の交通は開け、歐人で東亞に来るものが多く、これら旅行者の紀行によつて、歐人が東亞遠征に志すものも漸く多くなつて來た當時の交通路は黒海から陸路で中央亞細亞を経て東洋に来るか、又は埃及から海路

で印度洋を経て東洋に来るかを普通としてゐたが、土耳其帝國が起つてから、この二交通路は共に不便が多かつたので、明の中頃から歐洲一般で東洋に到達する新航路の發見を奨勵した。そうして葡萄牙人・西班牙人がまづ東洋に來り、和蘭人もこれに續いた。

葡萄牙人 葡萄牙人は國人ヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を廻つて印度に達してから、東洋に航行する者が頗る多く、遂に印度西海岸の臥亞を略して根據地とし、更に南支那海に出で、次に阿媽港を占領して、盛に支那日本と貿易した。

西班牙人 西班牙人は葡萄牙人と反對に、南亞米利加を廻つて太平洋に出で、ついでフイリツピン諸島を占領し、マニラを根據地として、東洋の貿易に従つた。

蘭人 蘭人は前二者に後れて、東洋の貿易に従事したけれど、間もなく兩者を壓倒して、爪哇のバタヴィヤを根據地とし、更に臺灣を占領し、盛にわが國及び支那と貿易し、遂に東洋貿易の覇權を握つた。

耶蘇教の東漸 東洋の航路が開けてから、耶蘇教士が東方に布教を試みる者が多かつたが、中にもイエズイット派のフランシス・サヴィエルは印度・日本に布教した後、支那に向ひ、中途で死んだ。ついで同派のマテオ・リツチは支那に來て、明の神宗の許可を得て、北京に會堂を建てたので、イエズイット教士が多く支那に來るやうになつた。これらの教士は曆法・數學・砲術に達してゐた。明廷の信任を得て、皇族や・大官で歸依する者が多く、中にも徐光啓が尤も有名だつた。

元・明の文物

儒學 北方の蠻族から起り、武事に長じ、喇嘛教が流行した元代でも、學術を尊んだ事がないでもなかつた。又一代の名儒があつたとはいへど、皆宋の儒者には及ばなかつた。明の初、方孝孺の凜然とした節義は既にのべた所、其學問は亦淺くなかつた。然し明の學者は、概して新説を出さなかつた。ただ明の中世になつて、

王守仁が出て、博學で獨創の識見に富み、始めて良知の説を唱へて、道は我心に求むべきことを説き、また知行合一の理を教へた。此説は朱子學に對し、陽明學として世に行はれ、我國の中江藤樹・熊澤蕃山・大鹽中齋（平八郎）等も篤く之を信じた。

小説・戯曲 元明文學の一特色は、小説・戯曲の發達にある。三國志演義水滸傳などの歴史小説も元代に出たものである。北方蠻族によつて建國された元代に、小説戯曲の發達したのは、支那文學史上注意すべきことである。

科學の進歩 次に此時代の學術の新潮流は科學の進歩にある。元の時には東西の交通が開けると共に、西方の學術が支那に傳はり、特に天文や曆法の進歩を助け、郭守敬の如き學者を出した。明末の耶蘇教士等は、布教の傍ら西洋の天文・曆法・數學・砲術を傳へ、是等の學術に關する洋書の翻譯も始めて支那に起り、本邦近世の文明にも影響した。

清の統一と外征

後金の太祖 金の滅亡後、滿洲族の勢は久しく振はなかつたが、明末に努爾哈赤といふ者が、赫圖阿拉附近から起つて次第に滿洲族を統一して、遂に國號を建てて後金といひ、皇帝を稱した。これを太祖といふ。明の神宗は朝鮮と協力してこれを夾撃したが、太祖は明軍を薩爾滸山に破り、瀋陽を取つて都をここに奠めた。

太宗の事業 太祖が死んで、子太宗が嗣ぎ、西方、漠南蒙古部を征服して、國號を改めて清といふ。この時朝鮮は、なほ明と通じてゐたので、太宗はこれを征服して封冊を受けさせ、また力を専らにして、南方、明を侵した。明の毅宗は吳三桂を遣してこれを防がせた。

明の滅亡 明は神宗の時から課税重く、國民はその負擔に苦しんだが、李自成が陝西で反旗をひるがへしたので、四方の流民はこれに響應し、明の北邊に事のある

のに乗じて北京に入った。毅宗は自殺し、明は二百七十七年で滅んだ。

清の一統 清の世祖はこれを機會に、明將吳三桂を助けて、李自成を代つといふ名のもとに、支那の北部を定め、都を北京に遷し、辮髮の令を下してその風俗に従はしめた。明の諸王は江南に據りて清軍の南下を防ぎ、また羅馬教皇及びわが國の援助を求めようとしたが、皆不成功だった。桂王は緬甸に入ったが、やがて清軍に獲られ、魯王は臺灣に退き、かくして支那本部は悉く清の手に歸した。

鄭成功 明の遺臣に鄭成功といふ者があつた。明人鄭芝龍の子で、母はわが平戸の人だった。清が江南を平定するや、すぐに魯王を奉じて臺灣に退き、その地の和蘭人を逐つてこれを占領した。されど魯王・鄭成功相ついで死し、世祖の子聖祖の時に、臺灣は遂に清の所有となつた。

三藩の亂 曩に世祖は明の降將吳三桂を雲南に、尚可喜を廣東に、耿繼茂を福建に封じて、明の遺族を鎮壓せしめたが、天下平定の後、三藩自ら安んぜず、聖祖の

時、吳三桂は遂に耿繼茂の子耿精忠、尚可喜の子尙之信と共に兵を擧げたが、數年の後、討ち平げられた。

清の塞外征略

紅教喇嘛及び黄教喇嘛 西藏の喇嘛はもと紅衣、紅帽を著けてゐたので、紅教喇嘛といふ。紅教喇嘛は元代から明初にかけて支那政府の尊信を受けた爲、頗る驕惰となり、殊に妻子を蓄へて、その弊害は少くなかつたので、明の初に宗喀巴といふ者が宗教改革を唱へ、新喇嘛教を建てた。宗喀巴は黄衣・黄帽を著けたので、黄教喇嘛といふ。

黄教喇嘛の勝利 宗喀巴の死後、その後繼者は代々達賴喇嘛と號して、黄教喇嘛を總管したが、黄教は次第に勢力を増し、後には西藏全土に遍く、また韃靼部長俺答の歸依を得てから、内外の蒙古や天山北路に流通するやうになつた。

準噶爾部の強大 衛拉部は、也先の死後分裂して統一しなかつたが、明末になつて、伊犁地方の準噶爾部は衛拉部から起つて、遂にこれを統一し、更に西藏を威服し、その上當時東察合台汗の衰微したのに乗じて、天山南路を併せた。

清と準噶爾部との衝突 是で準噶爾部は東に向つて漠北蒙古部に侵入し、蒙古部は敗れて清に保護を請つたので、聖祖は親征して大いに準噶爾部の軍を土拉河畔に破つた。漠南蒙古部は曩に清に歸服し、漠北蒙古部も今また清に降服したので、内外蒙古は全く清の版圖になつた。

西藏の征服 準噶爾部は更に西藏の喇嘛の力を借りて恢復を圖つたが、清軍が西藏に入つて喇嘛を征服し、ついで聖祖の子世宗は駐藏大臣を拉撤に置いてこれを鎮壓し、また青海地方をも占領した。

準噶爾部の討滅 準噶爾部は、この失敗の後、なほ天山南路の回教徒と協力して清の西邊を亂した。清の世宗の子高宗は大軍を出して、準噶爾部を滅し、併せて天

山南路を平定した。かくて天山南北兩路は全く清の所有になつた。

印度支那諸國の朝貢 高宗は西北方面を平定し終るとすぐまた西南方面の經略に従つて、暹羅・緬甸は皆清の封冊を受けて、その朝貢國となつた。安南の大越國はその頃内亂が起り、阮文惠といふ者が、大越を滅して安南を一統した。高宗はこの内亂に乗じて、安南を撃ち、これを朝貢國とした。

清の制度と學術

康熙乾隆時代 清は滿洲から起り、次第に塞外を平定して大いに領土を拓いたがこの間にあつて尤も功業の大きかつたのは聖祖と高宗とである。聖祖は在位六十一年に及び、外征の偉功に加へて、内治の治績も甚だ大きい。高宗もまた在位六十年に及び、文武の功績の盛なことも聖祖につゞく。世にこの二代を稱して、康熙乾隆時代といふ。清の制度の備り、學術の盛となつたのは、皆この時代のことである。

中央政府 中央政府の組織は、上に内閣があつて、その大學士は天下の政務を總理し、軍機處があつて、その大臣は軍國の機務を議定したが、やがて軍機處は天下の實權を握つて、大學士は閑職となつた。その下に吏・戶・禮・兵・刑・工の六部及び理藩院の尙書があつて、行政を分擔した。六部の職掌は唐の六部と同じで、理藩院は藩部を管理した。これらの官吏は成るべく同数の滿人・漢人を併用して、漢人の不平を避けた。

地方廳 支那本部はこれを十八省とし、天山南北兩路はこれを一省とし、省の下に府・州・縣を置いた。大抵二省毎に總督を置き、その管内の文武の大權を統べさせた。その下に巡撫及び提督があつて、共に一省一人を常とし、巡撫は省内の民治を掌り、提督はその兵事を統べた。その下に知府・知州・知縣等があつて各々その管内を統治した。滿洲は三省に分け、各々將軍を置き、藩部は内蒙古だけは理藩院に直隸し、他は大臣を置いてこれを統べた。

兵制 清の兵制は八旗と綠旗とに分れる。八旗は太祖の時、滿洲兵を八旗に編制したのに始り、ついで蒙古人・漢人を以て各々八旗を編制した。八旗の兵は皇帝の親軍で、滿洲及び京城を警衛するのを主とし、また全帝國內の要地を守備した。各旗に都統があつてこれを統べた。綠旗は明の滅亡後、専ら漢人で組織した常備軍で、支那本部の守備を主とし、各省の提督がこれを統べた。

考證學 程朱學また陽明學の流行して以來、學者は理論を尙び、事實の研究を忽にする弊があつたので、清初に顧炎武が出て立論に證據を重んずる考證學を開いた。ついで閻若璩・錢大昕・段玉裁等の學者が輩出した。聖祖・高宗等は、大いに學術を奨勵し、學者を集めて有益な書籍を救撰させ、殊に高宗は天下の遺書を索め、圖書館を設けるなど、色々學者の便益を圖つた。

耶蘇教士の任用 明末からイエズイット派の耶蘇教士で北京に来る者が多かつたが、清の世祖が北京に入るや、アダム・シャールを用ひ、聖祖もフェルビーストを

用ゐて天文臺の長とし、また同派の教士を用ゐて、始めて支那全國を測量し製圖した。その他、支那の曆法・砲術・數學・繪畫等もこれらの教士の力によつて大いに進歩した。

耶蘇教の禁止 ジェスイツト派は、かやうに政府の信任を得た上に、その布教の方法は支那の舊慣と調和することに力めて、民間の好評を博した。されど、他派の耶蘇教士は孔子及び祖先の祭を迷信として悉く排斥したので、世宗は耶蘇教を支那の國體に害があると認めて、これを禁止して、政府の任用した外の教士を退去させた。

莫臥兒帝國の興亡

ウズベツク旋の南下 明の初に帖木兒が死んで間もなく、その大帝國が分裂したのに乘じて、欽察汗に屬してゐたウズベツク族が南下し、中央亞細亞を占領して、

布哈拉・基華の二汗國を建てた。帖木兒五世 孫バベルは頻に恢復を圖つたが、成功しなかつた。遂に印度に退き、こゝに莫臥兒帝國を興した。

アクバル大帝 印度の佛教は唐の中世から衰へ、これに代つて波羅門教の一新派であるヒンヅー教が流行し、ついで宋初の頃から回教徒が侵入して、次第に印度を占領したので、二教徒の争は絶えなかつた。所がバベルの孫のアクバルが位に即いて、自らヒンヅー教徒と婚を通じて、二教徒の感情を融和するのに力めたので、ヒンヅー教徒もこれに心服して、南印度の外、悉くその版圖に歸した。

莫臥兒帝國の衰微 アクバルの曾孫アウランゼブの時、始めて南印度を平定して全印度を一統した。されど、アウランゼブは回教を崇拜する餘り、ヒンヅー教徒を冷遇したので、これらの反亂を企てる者が多かつたのに、アウランゼブの後嗣は概ね庸劣で、これを鎮定することはできなかつた。かやうにして莫臥兒帝國が次第に衰微したのに乘じて、英人は印度侵略に著手した。

かやうにして英人は佛人に代つて莫臥兒帝國の侵略に著手し、ヘースチングスが始めて印度總督となつてから、以後の總督は皆この計畫を繼續し、遂に莫臥兒皇帝に年金を與へ、英人がこれに代つて全印度を支配した。莫臥兒皇帝は、後に印度備兵の亂に與つて位を奪はれ、こゝに莫臥兒帝國は滅亡した。

英國の東方經略

蘭・英二國 明の中世に發端した西洋人東漸の勢は、近世になつて益々烈しくなつた。

和蘭人は明末から東洋貿易に従事したが、先來の葡萄牙・西班牙兩國人と競争して之に勝ち、瓜哇のバタビヤに其政廳を置き、更に一時臺灣を占領して、我長崎の出島に居留して、盛に貿易を營んだ。英吉利人も和蘭人と略々同時に、東洋の利權に着眼して、東印度會社を立て、次第に葡萄牙人を壓倒した。此會社は貿易會社で

あるとともに、後には、統治機關となつたといふことも、特に注意すべきものである。

英・佛競争 佛蘭西人も亦英人も殆んど同時に東印度會社を立て、各莫臥兒帝國の衰運に乗じて競つて印度を侵略した。競争 初には、佛人の勢が盛だったが其後英國東印度會社書記出身のクライブが善く戦ひ、大に佛軍をブラッシーに破り英人の威力を印度に輝かした。それは丁度清朝の乾隆年間だつた。

英領印度 クライブ及び初任の印度總督だつたヘースティンクス以後の諸總督が着々功を奏して、だん／＼莫臥兒帝國を蠶食し、遂に其皇帝を廢して同帝國を亡し、英國女皇ヴィクトリアが印度女皇の位を兼るやうになつた。其後英國は緬甸を併せ馬來半島の諸小國をも保護國としてしまつた。

阿 片 戰 役

阿片戰役 康熙・乾隆の全盛が衰へかけた後は、清の變患時代となり、阿片戰役になつて、始めて一大外侮を受けた。此戰役は英國の東方經略と大いに關係があつた。英人は既に印度に勢力を得てかゝり、盛に印度の阿片を清國に輸入した。清人は其が金錢を費し、時間を失ひ、そして心身を害することが甚しいので、其輸入を禁じたが、猶密輸入を行つてゐたので、乾隆帝の孫宣宗の時に、欽差大臣林則徐は廣東英商の阿片を焼き其通商を禁じた。

阿片戰役 是で英國艦隊は、貿易保護を名として、廣東・厦門・寧波等の諸港を封鎖攻撃し、遂に南京に迫つた。

南京條約 清朝もこゝになつて大に恐れ、南京で和約を結び、償金を出し、五港を公開し、且つ香港を割讓した。この後阿片の禁止が行はれないばかりでなく、清朝の國威は次第に衰へた。又この後清國と西洋諸國との條約が漸次に締結され、實際關係も愈々密接となつた。

長髮賊と英佛軍の侵入

長髮賊 清朝は既に外國に敗れて、その上また内亂に苦しんだ。南京條約後八年になつて、洪秀全は亂を廣西に起し、清を討ち明を興すと稱して、漢人の心を收め耶蘇教に附會して、外人の意を迎へ、國を太平天國と號し、其勢は大へん猛烈で遂に南京を取つて之に都をうつした。之を長髮賊といふ。官軍は弱くて之を平げることが出來ず、宣宗の子文宗が詔して勤王の兵を徴した。曾國藩を首として義勇兵を起して、賊軍を破つたが、賊の勢も中々挫けなかつた。

英・佛聯合 時に廣東の官吏が英船を搜索して、乗組の清人の犯罪を執へた事があつた上に、佛國の宣教師も廣西で殺されたので、英・佛二國は聯合して北清を攻め、遂に天津に迫つて、假條約を結んで、一時終つたが、清國は其批准交換の公使を砲撃したので、二國の兵は又天津・北京を陥れ、遂に北京條約を結び、清國は

償金を出し、基督教の布教を許し、新に七港を開いた。

長髮賊平定 此 外患の爲めに、長髮賊の平定が大へん後れたが、文宗の子穆宗の時になつて、米人ワルド、英人ゴルドン等相ついで官軍を助け、曾國藩・李鴻章等も奮戦して南京を恢復したので、洪秀全は自殺し、餘賊も次第に平定された。此亂は前後十五年、其禍を被つた者は十六省に互り、清の國力は疲弊し、外國の壓迫は益々甚しくなりつゝあつた。

露國の滿洲經略

滿洲經略 露國の東略の鋒も、康熙帝の世に、一時挫折の形であつたが、常に好機を窺つてやまず。ムラビヨフが東部西伯利亞の總督となるや、頻に滿洲經略を計り、遂に長髮賊の亂に乗じて、黒龍江北の地を占領した。そこで英・佛聯合軍が北京を陥れると、露國は講和の事に周旋した報酬として、烏蘇里江以東の地を取り、

其南端に浦潮斯德港を開いて、東方經營の根據地とした。

滿洲經略の餘波 この後露國は漸く朝鮮の北境を壓する形勢があつた。而してまた露國は我國と交渉し、千島と換へて樺太島を得たので、日本海北部沿岸の大陸及び一大島は皆露國の領地となつた。

露國の中亞細亞經略と伊犁事件

中亞細亞經略 露國の地慾は東方の經略に満足せず、中亞にも及んだ。中亞の地は帖木兒大王の死後分裂紛争して統一がなく、露國は之につけて、康熙帝の頃から着眼し、だんく之を侵略して、明治九年の頃迄には、アム河以北の地は、悉く露國の所有とした。

伊犁事件 かくて露國は次第に清國の西北境に接近した。そして偶々清國同方面の伊犁に回教徒の亂があると、露國は邊境鎮撫といふ名のもとに同地方を占領した

こゝで清の將左宗棠は其亂を平げ、清國は露國に同地方の還附を求めたが、露國は之に應ぜず。兩國は將に開戦しようとしたが、曹記澤が露國に使用して協議し、コルゴス河を兩國の境界とし、且つ清から償金を出して局を結んだ。
英・露衝突 露國は更に中亞侵略の鋒を南に進めて、印度洋方面に出ようとしたが、印度を領してゐる英國は、勿論之を喜ばず。アフガニスタンの後援となつて反對し、遂に英・露二國の委員は會議をして境界を定めた。而して中亞のパミール地方も清・英・露特に英・露二國の利害衝突の地となつて、又紛議を生じたが、二國協議して同地方に於ける二國の勢力範圍を定めて其局を結んだ。

佛國の印度支那經略と清・佛戰爭

佛國と安南 さてまた佛蘭西は清初より安南に着眼し、遂に其地の王族阮福映を助けて、越南國を建てさせ、且つ基督教布教に力む。安南人は佛人に親まず、また

其布教に政治的意味があるとして、排外の心を起し、屢々其宣教師を虐待したので、佛帝ナポレオン三世は柴棍を占領して越南に迫り、終に交趾支那の地と償金を得、且つ東埔塞も其保護國とした。かくて佛國は愈々侵略を選しうしたので、越南王は長髮賊の殘將劉永福に佛軍を伐たせたが、國都順化府が陥るに及んで、佛國の保護國となり、且つ東京地方を割いて講和した。

清佛戰爭 けれど、清國は越南を以て其外藩だとして、此講和を黙視せず。劉永福を助けて佛軍を攻撃したので、清・佛二國の和親は忽ち破れ、佛國の海軍は福建地方を攻め、且つ臺灣の諸港を封鎖したが、李鴻章は佛國公使と會議して、和約を結び、清國は佛國の東京地方占領を承認した。こゝに佛領印度支那成立し、さきに印度に於ける英人との競争に失敗した佛人も、此方面では成功した。

佛暹關係 ついで佛國は、眉公河東の地は曾て越南及び東埔塞に屬してゐたと主張して、暹羅に迫り、同河を以て佛國領地と暹羅との境界とさせた。これで一時は

大體清朝の藩屬の様な状態だった。印度支那半島の諸國は、暹羅を除くの外は西洋強國の領土となつた。

北清事件に至るまで

總説 清國が外患を被ることは道光以來既に五十餘年にもなつた。而かも近頃になつて、西洋列強の壓迫は益々甚しく、清朝の前半の隆盛と、後半の衰弱とは非常な相異がある。今之をのべるにあつて、東洋諸國の關係から説明を起さう。臺灣征伐 清國は第十世の同治帝になつて、明治維新の我國と。新に和好の條約を結んだが、我琉球の漁民臺灣に漂着し、生非に殺されたので、我國は清國を責めたが要領を得なかつたので、生蕃を征服した。清國は俄に異議を唱へたが、遂に償金を出して和を請つて來た。其後我國で琉球に沖繩縣を立てると、清國は又異議を唱へた。かくて日・清兩國の感情は和合せず。遂に朝鮮の事で衝突するやうになつ

た。

朝鮮開國 朝鮮は、清の初以來、世々清の冊封を受けて、清に朝貢し、我國に對しては、徳川將軍の更代毎に來聘して、近世になるまで其國內に大事がなかつた。

明治維新の初め第二十六世の國王が位に即いた。年が猶幼くて生父大院君が攝政したが、世界の太勢に通せず、固く排外鎖國主義を執り、我國から開國通商を勧めたが之にも應ぜず。加之、朝鮮人は遂に我軍艦を江華島に砲撃したので、我國使黒田清隆・井上馨は其罪を問ひ、遂に朝鮮に通商條約を結び、釜山の外に元山・仁川の二港を開かせ、且つ其獨立國であることを確認した。是で歐米諸國も亦我例に倣つたが、朝鮮は猶清國に對しては外藩の禮を執つてゐた。

朝鮮の内訌と日・清の交渉 此頃から朝鮮に二黨おこり。獨立黨は大體我國に依つて、獨立開國の實を全くしようとし、事大黨は所謂大國に事へて其國を保たんとする者だつた。そして朝鮮王が長じて政を親らするやうになると、王妃閔の一族

は政を專にしたので、大院君は不平を抱き、遂に亂兵を煽動して閔黨を撃ち、併せて京城の我公使館を襲つたので、我公使花房義質は其罪を責めて償金を取り、且つ我公使館に守備兵を置くことを約した。是で清國も亦袁世凱に兵を京城に駐在させた。

既に獨立・事大二黨の争は益々甚しく、獨立黨の金玉均・朴泳孝等は兵を擧げて、事大黨を撃ち、國王を擁して、我公使の援を求めたが、清國は事大黨を助けて獨立黨を破り、且つ我公使館を襲つた。是で我國は井上馨を遣して、朝鮮を責めて償金を出させ、また特に伊藤博文を清國に遣して、李鴻章と天津に會議して、日・清兩國の朝鮮駐在兵を撤去し、且つ將來軍隊の派遣を要する時は、兩國は互に通知するといふ事を約した。之を天津條約といふ。時に獨立黨は多く國を去り、事大黨が要路に立ち、清國の駐在官袁世凱は朝鮮の政治に干渉し、朝鮮に於ての清國の勢力は甚だ盛だつた。

日・清戦争 天津條約の後、約十年を経て朝鮮に東學黨の亂があつた。東學黨はもと西教を斥け、東學を興さうとする保守狂熱的人士の團體だつたが、暴官汚吏に苦しむ人民も、亦之に合さつて、遂に亂を起した。其勢は猛烈で制し難かつたので、朝鮮は清國に援を乞ひ、李鴻章は直に大兵を出して、朝鮮在留の國民を保護し且つ日・清兩國協力して、朝鮮の政治を改善しようとして清國に勸告した。當時我朝鮮公使は大島圭介だつた。然し清國は猶朝鮮を藩屬視して、我國の勸告を拒絶し、反つて我國に對して撤兵を求めたので、日・清の國交はここに破れ、其の戦端は、陸は成歡驛に、海は豊島沖に始まり、山縣有朋・伊東祐亨等の率ゐた我陸海軍は連戦連勝して將に北京を衝かうとした。

そこで清國は大に恐れて、李鴻章等を我國に遣し、伊藤博文・陸奥宗光と下ノ關に會議して、清國は朝鮮の獨立を認め、償金を出し、遼東半島及臺灣・澎湖列島を割讓し、且つ沙市・重慶・蘇州・杭州を開放することを約して局を結んだ。

三國干涉 かくて我國は名譽ある戰勝國となつたのに、歐洲列國中、我國の隆盛を悦ばない者があり。獨・露・佛の三國は協同して、遼東半島の還附を勸告したので、我國は深く時局の大勢を察して之に従ひ、代償金を受けて、遼東半島を清國に還附した。

諸強國の壓迫 日・清戰爭の後、歐洲列強は清國の弱點を看破して、競つて清國を壓迫し、佛國は先づ佛領印度支那に近い廣東・廣西・雲南の鑛山探掘權を得、露國は滿州鐵道の敷設權を得、獨逸は其宣教師の殺されたのを口實として、償金の外に九十九年間膠州灣租借の權を得、ついで露國は更に旅順口及び大連灣の二港を、佛國は廣州灣を借り受けた。

かくて英國も清國に於て列強との勢力平均の上から列國の進取を傍觀せず、威海衛を租借して權衡を保つた。是で清國の南北の良好な軍港は、多く西洋列強に租借せられた。

清國の改革黨 かくして清朝の進歩は益々艱難となつた。有志の清人は大へんに憤慨して改革自強の説を唱へた。徳宗はつひに廣東の學者康有爲の説を納れて、政治の改革を計つたが、清廷の老臣及び滿州人の多くは之を悦ばず、西太后を擁して政を聽かせ、帝を幽し、改革黨を除き、排外保守の氣運はまた盛となつた。

義和團の亂 已に山東地方に耶蘇教の撲滅と、外人の排斥とを旨とした義和團といふ暴徒が起り、皇族端郡王等の保守派は、寧ろ之を保護する様子だったので、團徒は益々勢を得て、遂に北京に入り、列強の公使館を攻撃した。

列強の進撃 是で、日・英・米・露・獨・佛・奧・伊の東西八強國の聯合軍は、急に公使及び居留民を救つて、遂に北京を占領したので、徳宗と西太后とは、一時西安府に避難し、慶親王・李鴻章は列國使節と議し、償金を出して謝罪使派遣、各國の北京駐兵公使館保護等の事を約束して、此所謂北清事件は終つたが、清朝の運命はこれが爲に大に短促せられた。

北清事件以後

朝鮮の獨立 朝鮮は日清戦役の下ノ關係の結果、我國の爲に獨立國の名義を完全にし、清國に對する朝貢の禮を廢し、遂に國號を韓と改めた。そして我國は益々熱心に之の扶植に力めた。けれど、是より以前、英・佛軍が北清侵入の頃から、漸く韓國の北境を壓迫してゐた露國の勢は、次第に朝鮮に加はり、韓國皇帝及び太子は一時王宮を出て、露國公使館に幸することになつた。かくして韓國に對しての我國は、日・清戦役前に清に對した所を今清國より強大な露國に對することとなつた。けれど、我國は力を盡して之に當り、日・露協商を結び、韓國の獨立保全を確認することを議定した。

日・英の同盟 然れども、韓國に對する露國の野心は猶まだ止まず。加之、露國は義相團の亂に乗じて、滿州の要地を占領して、其志は測る可からざる形勢に

あつた。是で其利害共通一致の點を有してゐる日・英兩國は、同盟を結び、清・韓國の保全と東亞の平和とを圖るのを目的としたので、露國も遂に十八箇月間に撤兵することを宣言した。

日・露の戦役 然るに露國は撤兵の宣言を實行しないばかりか、韓國に於ける我國の權利を侵害し、又韓國の安全をも危うくするやうな態度だつた。こゝで我國は誠實な妥協によつて、時局を解決しようとして切望したが、露國は之に應じなかつたので、我國は自國の安全と東亞の平和との爲に遂に宣戰を公布した。

開戦の初から、我海軍はよく機先を制し、後に大山巖・東郷平八郎等の率ゐた我陸海軍は連戦連勝し、露國の勢を大にくちいた。乃ち我全權大使小村壽太郎等は、露國の全權ウキツテ等と、米國のポーツマスに講和會議を開き、露國は韓國に於ける日本の優先權を認め、遼東半島の租借權と、長春以南の鐵道を日本に讓與し、兵を滿洲から撤し、且つ樺太南部を割讓することを約して和を結んだ。

戦後の滿洲 日・露戦役の後、滿洲の大部分は露國の勢力範圍から脱して、世界に開放されるやうになつた。滿洲の南端は我國の租借地となり、關東都督府を開き之を經營した。此租借地は日本が外國に租借地を持つ最初のものだつた。ついで旅順鎮守府を設置した。是れは即ち我帝國の外亞細亞大陸の一角に國法上の海軍根據地を置く始だつた。

日本の韓國併合 日・露戦役後、國狀變動の最も大なるものは、韓國だつた。ポーツマス條約の結果、我が國は韓國に對する優先權を得たので、先づ日・韓協約を結び、韓國の外交權を收め、新に統監府を置き、伊藤博文が始めて韓國統監の重任に就いた。こゝで千數百年間日本・支那及び滿洲方面の諸強隣國の勢力競争場だつた朝鮮半島も、今は全く日本の保護監理の下に歸するやうになつた。然るに、韓國皇帝は之を快しとせず、往々時宜に適當な行動をとつて物議を起したので、遂に位を皇太子に譲り、ついで第二の日韓協約を結び、韓國の内政も、亦統監の承

認指揮を受くることゝなつた。かくして韓國に對する我國の宗主權は益々確實強大となつた。

爾來、韓國保護、施政改善の實が益々擧がつたが、禍源猶未だ絶えず、我伊藤博文は遂に韓人の毒手に斃れ、内外人大に驚く。ついで韓國の一進會員は日・韓合邦請願書を提出したが、事はまだ成就しなかつたが、日・韓相互の安寧を増進し東洋の平和を永遠に維持する爲に、韓國併合の已むなきを認め、遂に明治四十三年に永久に韓國を我帝國に併合することゝなつた。そして韓國を改めて朝鮮と稱し、朝鮮總督を置いて諸般の政務を總轄する事になつた。

清國の晩年 次に清國は、日・露戦役中局外中立を守つたが、我帝國の戦勝の結果を視て、益々深く日新文明の利を感じ、且つ又利權回收の念を起すと共に、國政改革の緊要なることを認め、特に深く我明治維新の事に感じて、教育、政治、改善に注意し、遂に立憲政體採用の上諭を發し、ついで十年の後に國會を開くことを約

し、其他纏足・阿片吸烟の弊風改良等の議もあつた。徳宗及び西太后は崩列し後、其年僅に三歳の幼天子宣統帝が位に即くと、其父醇親王が政を攝して、銳意國事に當り、國勢は稍々回復の兆があつた。其後輿論は益々國會の速開を希望し、遂に宣統五年には國會を開く旨の上諭が發布せられ、且つ新内閣官制の發布と、其組織とを見るやうになつた。然れども、其閣員は殆んど皇族で占められた。是に於て全國の志士は、皇族内閣は列國に無い所、國家に益ないのみならず、また皇族の幸でない。別に立憲責任内閣を組織することを要求したが、攝政王は之を許さず。人心はつひに大に去つた。

支那の革命

革命の國 支那は其國體が我國と異い。古來屢々主權者の革命興亡があつて、政治上歴代の國號を有してゐるが、自ら固有の地理的國名はない。國人が自稱する中

國または中華は外に對する自尊的美號で、國名ではない。支那といふは、衆説に従へば、今から二千一百餘年前に全國を統一した、秦朝の娛名が遠近に震ひ、諸外國は秦を轉訛して支那と呼んだものだといふ。また漢といひ、唐といふは、漢・唐二代は歷代中の盛時で、その國運は頗る長久で、その威名は四方に傳はつたからである。清朝も太祖以來十二世、約三百年の命數を保つたが、天命人心二つとも、清朝を去つて、清朝も亦遂に革命の哀史に記される事となつた。

革命軍勃興 光緒十八年に、廣東人の孫文は興中會を創立して、革命の機關として清朝を倒して、漢人の天下を興さうとした。その會員には廣東人が多く、米國及び南洋諸島に寓居する者も相ついで入會した。日・清戦役が起るとすぐ兵を廣東に擧げやうとしたが、密謀が露顯し、孫文は海外に遁れ、至る所で革命を鼓吹し、その名聲は漸く世界的にあらはれ、黨員も漸く盛となり、北清事件の頃から革命黨員で兵を起す者が少くなかつた。廣東省内に事を起した黃興も其一人だつた。而して

清朝は改革日新の氣運に伴つて、内閣制度を定めるやうになつたが、徒に立憲政治を口にして、實行の誠意に乏しく、政治は依然として振はず、廣東に革命軍がまた起つた。謀が洩れて黨員は七十餘人も死んだ。

時に清朝は鐵道國有を斷行するや、すぐに各省の人民は多く之に反對し、四川地方の反抗が尤も烈しく、官吏の壓制も亦最も激しかつた。而し湖北の地方官も亦嚴に革命黨を抑壓したので、黨員は湖北軍隊と結び、兵を起して武昌を占領し、黎元洪を擧げて革命軍の都督とし、やがて漢口・漢陽を陥れた。

支那共和國 清朝は武・漢の事變を聞き、大に驚き、陸海軍に漢口を攻めさせた十日許後に、湖南・江西・山西・陝西の諸省も、また既に革命軍に應じて、北方の軍隊も亦政體改革を唱へる者があつた。清帝は已むことを得ず、己れを罪すといふ詔を下し、又憲法信條を頒つた。けれども人心が共和に向つたのは、つひに之を防ぎ難く、漢口方面の清軍は亦利がなく、清廷大勢が日に去るを以て、使を遣して

民軍即ち革命軍と和を結んだ。民軍の代表者伍廷芳は、清の使唐紹儀と談判し、將に國會を召集して政體を解決しようとした。時に各省の代表者は南京に會し、孫文を擧げて臨時大總統とし、臨時政府を組織した。

清朝の内閣總理袁世凱はなほ民軍と和議を計つた。けれども民軍の意氣は甚だ盛だつたので、清帝も爲すべき策がなく、袁世凱に命じて、民軍と清朝皇室優待條件を議決させ、乃ち退位の詔を降して、一切の政權を去り、ただ依然として皇帝の尊號は存してゐた。かくて清朝は太祖から十二世二百九十七年、世祖の北京即位から十世二百六十九年で終つた。

この報が南京に傳ると、孫文は辭職し、袁世凱は參議院に推されて、臨時大總統となり、翌年四月、第一回民國國會を北京で開いた。既に舊革命黨員等は、袁世凱の專横を憤り、同年七月第二の革命軍を起したが、大敗し孫文・黃興等は海外に奔つた。かくて同年十月國會の選舉によつて、袁世凱は大總統に、黎元洪は副大

總統に就任し、支那共和國は正式に成立し、列國は之を承認した。支那はこれまで陰曆を用ひてゐたが、民國政府と成ると、改めて陽曆を用つた。そして武昌革命軍擧兵の第一日である陰曆八月十九日は、陽曆十月十日なので、之を紀念する爲に、毎年十月十日を以て國慶日とし、全國民が特に慶祝する祝日となつた。

東 洋 近 事

日・獨開戦と日・支交渉 東洋平和の維持は、我國の外交の大方針である。是の爲に大正三年七月、歐洲の大戦が起るとすぐ、我國は此大方針に基いて、獨逸に對し、其日本海・支那海方面にある艦艇の撤退、及び膠州灣租借地の還附を勸告したが應じなかつたから、遂に戦を宣し、膠州灣を占領した。又我國は此大方針により翌年五月、日・支條約を結び、(一)遼東半島の租借期限を延長し(二)南滿洲及東部蒙古に於ての我優越權を認めさせ、(三)山東省に於ての獨逸の利權を我國で繼續

する事などを承認させた。

袁氏失敗 袁世凱は大總統となつてから、益々專横を逞くし、終に共和制を廢して自ら皇帝にならうとした。是で唐繼堯・鈞蔡等が第三革命軍を雲南に起すとすぐ、南北の諸省は之に應じ、其大勢は袁氏に不利だつたので、袁世凱は帝制宣言を撤回したが、革命派は堅く袁氏の引退を主張したので、袁氏は困惑憂悶して、遂に病死した。是で黎副總統は大總統となり、帝制首唱者を懲罰し、一時和局を結んだ。支那近事 その後安徽督軍張勳は、兵を率ゐて北京に入り、突然復辟を唱へて、一時共和政府を倒したが、段琪瑞等に討たれて忽ち失敗した。此事變後、黎總統は責を引いて辭職し、馮國璋が之に代り、段琪瑞は國務總理となり、支那は獨・澳二國に對して戦を宣した。ついで大總統徐世昌が就職し、銳意政を執り、現在の

大總統曹錕になるまで、内外多事多難、支那の前途は、未だ容易に樂觀することは出来ない。

あゝ、支那は萬里の國土を闢き、世を閱すること幾千年。文化は早く開け、聖賢英雄は時に臨んで多く出でた。試に世界の歴史を觀れば、盛衰強弱は皆原因がある。地が廣く人が衆いといつても、徳がなければどうして治まり盛になる事が望めよう。支那は今は特に大賢英雄が必要な時だ。誰かよくこの支那を平和にし隆盛にする者が出来ようものぞ。

印度の近狀 次に印度では約三十年前頃から其識者の間に國民的自覺が潑刺として起り、或は「印度は印度人をして治めしめよ」といふ自治運動となり、或は英國製の貨物を使用すべしといふ國産使用となり、英國に對する印度の形勢は、斷じて平穩ではない。英國人も決して樂觀すべからざる状態となつてゐる。

東洋歴史の知識〔終〕

昭和十三年十月二十日 印刷
昭和十三年十月三十日 發行

(定價金壹圓也)

不許複製

著 者 小 林 善 八

發行者 東京市中野區小瀧町四九番地
市 川 靖 己

印刷者 東京市中野區小瀧町四九番地
東京出版通信社印刷部

發 賣 所

東京市中野區小瀧町四九番地
東京出版通信社

電話中野六七〇四番・振替東京八四八三八番

終

